月刊ナイトバグ　白酒酔いどれどんちゃん型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 3月号
雛特集
お内裏様とお雛様と厄神様と他色々
8Pケロケロバトル漫画
明日ハレの日、
雛の昨日　…Step
新連載ＳＳ
害蟲の誉れ《上》～Lovin' Vermin～　…西遊
読切り作品
SS　:中国/悠奈/くろと/社 蛍夜/夏樹 真/
漫画:巳/東/羅外/preludenano
連載作品
SS　:如月翔/壁々
漫画:HOUSE/ひどぅん/草加あおい/怒羅悪/

「蛍(わたし)たちの勝ちね」

― “The bright star on Xanadu” ―
Bullets, she shoots, shine brighter than every fixed star in the sky.

月刊ナイトバグ　2010年3月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

幽香とリグルが
ちゅーするだけの漫画
ちゅ……ぷ
ぺろ…
ちゅっ♡
んっ……
はぁ……んっ
あぁ…ちゅっ
ぺろ♡
んっ
ふぁ…
じゅる♡
ちゅぷっ♡
あっ…ん
れろ♡
幽香さん…
ぷはぁ♡
リグル…
一方
そのころ
なんてこった
サニーが
殺されちゃった！
この
人でなし！
DUDE
ギャ…
びえーん

作・羅外

害蟲の誉れ《上》　～Lovin’ Vermin～

著者：西遊

††

　悪は必要である。もし悪が存在しなければ、善もまた存在しないことになる。悪こそは善の唯一の存在理由なのである。

　　　　――アナトール・フランス

††

　その影は、ざわざわと蠢いて、少しずつ、少しずつ、それでも一歩ずつ、人間の里へと向かっていく。
　幻想郷でも人間が多く住む人間の里。妖怪の陰と隣り合わせの恐怖を常に抱きながらも、それでも多くの者がこの幻想の地で、各々の人生を営んでいる。
　そんな、人間たちが集う里を、
　黒い影が、襲おうとしていた。

††

　虫が。
　数え切れないほどの虫が。
　幻想の空を、占めていた。
　蝶、蛾、蜻蛉、蝸牛、蛞蝓、鍬形、甲虫、蛍、蜂、蟻、天牛、蝉、油虫、紅娘、蟷螂、露虫、蟋蟀、蝿、蚊、松虫、鈴虫、轡虫、壁蝨、蚤、虱、竈馬、蛭、虻、穀象虫、百足、蚰蜒、蜘蛛、馬陸、紙魚、飛蝗、飛蠊、七節、団子――
　多種多様折々の虫たちは、凝集し、凝縮し、一個体の影となって、のらりくらりと夜の帳を裂いていく。
　それを司るのは、一人の小さな妖怪少女。
「――行けっ！　今宵こそ、人間共を蹴散らせ!!」
　名は、リグル・ナイトバグ。
　蛍の妖怪。能力は『蟲を操る程度の能力』。
　彼女の蟲を操るその能力を以ってすれば、これほどの蟲を操ることが出来るのだ。――
　少々頭が弱いと、言われているけれど。
　言われているけれど、そこでへにゃりとへこたれる彼女ではない。原作で蚊取り線香だの避けただけだの五分の虫にも一分の魂だの斬り潰すだの、千々を重ねて散々馬鹿にされたけれど、それでも妖怪としての威厳ぐらいは、ある。あの人間達と妖怪達が狂ったように強かっただけで、リグルにもそれなりに力というものは有る。
　だからこそ、今こうして、
　蟲を操って、人間の里を襲っているのだ。

　里の櫓の鐘が鳴る。
　妖怪が来たぞと重く鳴る。
　その鐘の音に、すっくと立ち上がる姿が一つ。
「――来たか」
　里の賢者、知識と歴史の半獣が、里を守らんと走り出す。

飛んで火に入る夏の虫と云われる程度には、虫は火というものが苦手だ。小さな小さな虫の体は、火に飲まれれば瞬きの内に炭と化してしまう。

だからこそ、里の者達は火を焚いた。

それでも、『数』には勝てなかった。

飛んで火に入る、おぞましいほどの虫という虫。飛んで火に入り炭となり、一匹、十匹、百匹、千匹……夥しい数の虫が火に飛び込んだことで、最大の武器として、そして支えとして赫焉（かくえん）と燃えていた火は、あっという間に消えてしまったのだ。

リグル曰く、これぞ『蟲海戦術』。

食物連鎖の中間、数が成せる作戦だった。

火が消えたなら、後は蟲達の独擅場。

個性溢れる虫たちのオンパレードだ。

蟻は家屋を食み、蝉は挙って喚き出す。秋の夜長に鳴くはずの虫は、群れに群れて独唱輪唱大合唱。所構わず蝶が舞い蛾が舞い、ちなみに蝶と蛾は明確な違いが無いのだが、綺麗は羽を持つ彼らもこれだけの数が入ると、鱗粉という素晴らしい粉をばら撒くのである。のろのろと隅々を這うヌメヌネ系の御歴々は嫌悪感を煽り、さらにその上を行く筋金入りの方々――ゲジとかゴキとか――は、人間達をパニックへと誘う。統率がとれなければ人間というものは容易いもので、体に蟻一匹を這わせるだけでも叫びを上げるようになるのだ。

阿鼻叫喚、喧々囂々、蝉噪蛙鳴。

「虫を舐めてもらっちゃあ、困るよ！」

リグルは叫ぶ。天高く叫ぶ。

蟲を操る程度の能力は、たかが『程度』ではないのだと、それを証明するように。

しかし、

しかし、だからといって、

そう易々と妖怪にやられる人間様では、ない。

火が潰えたのなら、また焚けばいい。虫が襲ってくるのならば振り払えばいい。松明を燃える棍棒として振るう者もいれば、必死に虫捕り網を操る子供もいる。水を浴びせて飛び回る虫を落とす女性もいれば、悠々と剣を翳す老人だっている。

何故なら、ここが幻想郷だから。

ここが非常識の集う地であるならば、ここに住んでいる人々もまた、常識的では無いのだ。

戦線（フロント）は後退し、戦況は逼迫。

リグルは苦虫を噛み潰したような顔をして、戦況を打開すべく一斉特攻を仕掛けようと手を上げかけて、

そして、咄嗟に避けていた。

「――不可侵条約って、知ってるか？」

凛とした声が、真っ暗な里の空に響いて、

そして、リグルの頬に一筋の傷がついた。

後方には、目視できずに反射だけで避けた光の弾が夜の奥底に消えていくのが見えて、そして傷から、つー……と赤い何かが流れていた。

「妖怪は里と中立条約でも結んでたっけ？」

その赤い何かを手の甲で拭い、真正面から刺さるように飛んでくる鋭い視線に怯みながらも、リグルは妖怪としての威厳と虚勢を張る。妖怪が人間を恐れては、立場が逆だ。

正確には、彼女は人間ではないけれど。

向かい合った先、凛とした声と同じく凛とした姿に、図らずもリグルは見惚れてしまった。冷めきった夜の風に靡く白髪、ワンポイントの蒼い髪と同じ色の青いワンピース、胸元には赤いリボンを結び、ワンピースの長い裾を黒の背景にはためかせる女性。

上白沢慧音。

それが彼女の名前で。

里守。

それが、彼女を表す最上の表現だった。

「ほう、蟲でも条約ぐらいは知ってるのか」

「条（くだり）を約（つづ）めるって意味だろ？　約めるの意味は、知らないけど……」

ちなみに『約める』とは『簡略化する』という意味であるが、『条約』だけで『treaty』という一つの意味を内包しているため、リグルの認識は少しだけ間違いである。

閑話休題。

慧音がリグルの前へと現れたことで、里は瞬間凍結したかの如く静止した。

今や里では誰も戦っている者は居らず、停戦状態となっている。彼らの心は最早戦いにあらず、里人達の視線が、そして虫達の視線が、全ての視線が、里の空に浮かぶ二人へと注がれていた。

「さて……私が出てきたということは、どういうことか分かるだろうな？」

「さあ？　解らないね」

言うなれば、これは大将戦だ。

虫達の大将がリグル・ナイトバグならば、里の人間達の大将が上白沢慧音で。

そしてそれは、幻想郷の縮図だ。

「解らない？　判別も理解も、妖怪には求めていないよ。求めているのは唯一つ」

「里から出て行け、ってかい？」

妖怪は人間を襲う。

人間は妖怪を退治する。

ここが、幻想郷だから。

「わかってるじゃないか」

「全部わかってるさ。気に食わないことがあったら、何を使って戦うか、とかも――ねっ！」

だからこそ、ここでの決闘方法は、

「――蛍符、『地上の流星』！」

単純明快。スペルカードルールだ。

「全く全く、単純すぎて涙が出るよ。どうしてこう、幻想郷の輩は血気が盛んな奴が多いんだろうか……」

やれやれと肩を落とす慧音など全く意に介さず、リグルは小さな卵状の弾をその手から生み出す。ぐるぐるぐると、大きな渦を描くように生み出された蛍光の小弾は、渦から曲線へと成り代わり、

そして突然、慧音の真正面から流星が流れてきた。

真正面からの流星弾も視界の左右へと流れては消えていく小弾も慎重に避け、慧音はさて、と一息吐く。左右に流れる小弾は見掛け倒しで、むしろ厄介なのは、真正面からの速い弾だ。視界の左右で現れては泡沫のように消えていく小弾に気を取られているうちに、真正面からの速い弾に被弾するかもしれない。ちちちとワンピースの裾が弾に掠る音を耳に、それでも臆せず、地上の流れる星の中で、慧音は小さく言の葉を紡ぐ。

「倭建命(ヤマトタケル)の天叢雲(アメノムラクモ)、八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を草に薙げ。――
――国符『三種の神器　剣』」

夜の黒を白く染めるほどの、天をも照らす光を放ち、リグルの弾を全て打ち払い、そして慧音の手に握られたのは、三尺三寸の直刃の秋水(しゅうすい)。

天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)。

「いや、待っ、剣とか、反則……」

狼狽えるリグルの舌も引かぬうちに、女性が構えるには少しだけ長すぎるその大剣を慧音は一息で振り上げ、

そして、袈裟斬り一閃、空に薙いだ。

波状に斬撃として押し寄せる弾幕をリグルは一瞥して、そして逡巡、

「くっ――蝶符『バタフライストーム』ッ！」

避けきれない。

そう、体が反応していた。

流れる剣の斬撃を受け流し、蝶の嵐を隠れ蓑とする。撹乱の小弾をばら撒きながら、虎視眈々と慧音を討つ為の蝶弾を練る。

体勢を整えなければ、あの剣で一気に引き裂かれるだろう。

現に、慧音はリグルへと接近戦を持ち込もうと剣を構えて前へ勇んでいた。

だからこそ、リグルは真正面から蝶弾を食らわそうとした。

食らわそうとして、

「石凝姥命(イシコリドメ)の八咫鏡(やたかがみ)、天岩戸(あまのいわと)を天照らせ。――
――国符『三種の神器　鏡』！」

慧音が、符を掲げているのを、認識できなかった。

隠れ蓑として纏った蝶弾が、図らずも視界の妨げになっていたのだ。

リグルが放った『蝶弾』は、

慧音の八咫鏡に『跳弾』して、

「――っうあ！」

それは一瞬、

あっという間の決着だった。

あまり大きくはないその胸に跳ね返された蝶弾を触りながら、リグルは落ちる。
「……もう、慧音は、強いよ、強すぎる。今度、戦い方でも、教わろう、かな……」
　虫の息。たぶん、地面に衝突する前に、虫たちが助けてくれるだろう。

「――お疲れ、リグル」
　そんな声が、聞こえた気がした。

††

「というわけでっ……乾杯」
「改めてお疲れ様、リグル」
　とある夜雀の八目鰻屋。
　あろうことか、里の賢者と蟲の妖怪は、肩を並べて酒を酌み交わしていた。
「ふう……私としては、無事に終えて何よりだよ。あー疲れた疲れた」
「結構本気になってしまったな……すまない。っと、そうだリグル、報酬……は、もうこっそり持っていったようだな」
　事の真相は明快で簡潔だ。
――蟲を使った防災訓練。
　まるで、幻想郷のように、スペルカードのように、
　明快で、単純で、簡潔。
「うん、南の畑の万城目さん家の蔵からちょっと拝借したよ。これで先一ヶ月はなんとか飢えずにいけるかな……」
「虫も大分減ったことだしな……人も虫も、平和が一番だ」
　半分ほど空になった杯を、二本の指で摘んでゆらゆらと揺らしながら慧音はぼやく。心なしか、眦(まなじり)がトロンと垂れ下がっている。普段の凛々しい姿からは想像もつかないけれど、これでいて彼女はあまり酒に強くないのだ。
「まあ、増えすぎた虫たちの数量を管理するのも、私の役目みたいなもんだし。弔いは、そうだな、明後日かな……」
　正直なところ、幻想郷内の虫が増えすぎていて、リグルも手を焼いていたところだった。虫が増えすぎてしまっては、閉じられた世界である幻想郷の資源の枯渇問題に関わってくる。そこで今回、人間と虫を戦わせることで、虫の数を減らすことができたのだった。
　でも、と、リグルは杯をコトリと置いた。
「そんな風に考えてる慧音が、『平和の為にわざと戦争をするから手伝ってくれ』って私に言ってきたときは、流石にビックリしちゃったよ……」
　女将の夜雀がコトリと置いてくれた八目鰻の蒲焼きを大口で頬張る。炭火焼きだから、表面はカリッと焼き上げられていて、お蔭で旨味が逃げずに中に閉じ込められている。女将特製の秘伝のタレもあって、一噛みすると、じゅわっ、と口の中に上品な鰻の味が広がる。女将の包丁裁きに抜かりはなく、苦味や臭みは全く無い。慧音が黙りこくったまま杯の水面を見つめている間に、一本食べ終えてしまった。
　みすちー、もう一本追加で。
　カウンター越しに、あいよー、という呑気な声が聞こえてくる。
　と、おもむろに。
「――人里は、今や妖怪に守られている」
　慧音が、ぽつりと。
「それは、人間と妖怪の共存という意味では、間違っていないのかもしれない。でもな、たまに思うんだ。妖怪に守られてぬくぬくと生きるのが、この里にとって正しいのかどうか……」
　酔いに任せて、管を巻かせて。
「もし、だ。もし、外から流れてきた、ルールを知らない妖怪が里を襲ったなら、私は守りきれる自信が無い。……里の皆には、言えないけどな。だからこそ、自衛ができるようにならなくてはいけない。遠い昔に、人間と妖怪が繰り返してきて歴史のように、人間も強くなくてはいけない。だから……」
　そして吐露が終わったと言ったように、寝息が。
「……慧音も、苦労してるんだね」

カウンターにうつ伏せになったまま寝てしまった慧音の寝顔を眺める。
　人ならざる血を宿し、それでも人の為に生きる彼女。苗字が示すように、白沢の力を得た彼女。
　そんな彼女が人里に住み始めて、最初は嫌われもしただろう。罵詈雑言を浴びせられた日もあっただろう。半分妖怪、それだけで避けられた日も、あっただろう。
　リグルには、容易に想像できた。
　自分もまた、同じだったから。
「……ふぅ」
　ちびちびと、お酒を舐めるように呑む。
　それでもこうして、今は里の賢者として、慧音は信頼されて生きている。
　そこにあるのは唯一つ、「守りたい」という純粋な思いだ。
「全く全く、先生にはまだまだ教わることがいっぱいあるな……」
　マントの結びを解いて、彼女の背中に掛けてやる。雲の無い夜は、とても冷えるから。
　なんだか温かいものが呑みたくなって、みすちー、お燗頂戴、と頼んだ。
　いえっさー、と何故か英語で返された。

　里を守る彼女の小さな背中を見ていると、もう少し、里の害虫さんでもいいかな、なんて思ってしまったのだった。

††

　とある屋台の横の木陰。
　子供たちは、それを見ていた。
「――先生があの蟲野郎と話してるぞ！」
「もしかして『ダンゴウ』ってヤツじゃないか？」
「せんせーがアイツを説得してるだけかもしれないぞ？」
「でも、ワイロとか渡されてたら……先生が危ないよ！」
「……わかった、先生には知られないように、俺らだけであの妖怪をとっちめるんだ！」
　そうして里を想う心優しき子供達が、里を襲う蟲の妖怪を倒さんと、闇の中へと駆け出した。

《下》へ続く

〈作者コメント〉
　害虫だと思っていた虫が、調べてみたら実は益虫だった、なーんてことはよくあることです。里の為に自ら嫌われ役を受けるリグルと、里の為に体を投げ打つ慧音。利益は一致していますし。そんな、愛すべき害虫（ラビン・ヴァーミン）のお話でした。ちなみに続く。
　何が悔しいって、前号のパロディ特集に参加できなかったことです。うぼぁ。長閑氏のマリみてのパロを見て、次は幽香がリグルのマントの結びを直してあげる話とかいいかもしれないなー、などと現を抜かしていたり。うへへ。
　そういえば、なんやかんやで例大祭に受かってました。『は-41a』"Cielo Azzurro"です。リグルじゃなくてゴメンなさい。けねもこなんです。もしよければ、お立ち寄りくださいな――。

ばせば11

著者：中国

「・・・プレイッ！」
　うどんげはグローブの中の白球を見つめ、漠然と考える。何故、自分はこんな所にいるのであろうか。
　今、彼女が居るのは野球場。そして、彼女が着ているのはユニフォーム。つまり、彼女は、野球をしてるのである。否、やらされているのまちがいであろうか。思えば、それは先日の宴会の時であった。

「・・・という訳で、外には野球というスポーツがあるんですね。」
　文さんが野球とやらの説明を終えました。
「あら、面白そうじゃない。」
　姫様が乗ってしまいました。いやな予感しかしません。
「私もやってみたいなぁ・・・」
「ええっ！あの引きこもりが？なんで？」
「うどんげ、声に出てるわよ。まぁ、強いて言うならパワ○ロにはまったからかなぁ。」
　だめだこいつ・・・早くなんとかしないと・・・。
　そんなこんなで野球する羽目に。でも、二人では足りません。
　したがって、自分で集めるほか無いのです。姫様は姫様で勝手に八人集めるみたいですが。
　翌日。私は厭々メンバー探しに。
　とりあえず師匠。
　次に、竹林で会った妹紅と慧音。更に、偶然見つけたリグルとチルノ。
「これで六人っと・・・。あと三人ね。次は白玉楼かしらね。」
「あら、何してるのかしら？」
　いきなり現れたのは、紅魔館の主。
　びっくりするなぁ、もう。
「姫様がなんか野球やりたいとか言い・・・？」
　そこまで言って、気が付いてしまいました。目の前の吸血鬼が不敵を通り越して怪しい笑みを浮かべているのに。よくよく考えればあのニートが運動なんて言いだす訳が無いですし、このロリ蝙蝠。こいつは運命を弄れますね。そういえば宴会の時にもいたような気がします。
「で、これはどういうことです？」
「ええ、まあ。」つまり、姫様の運命を「野球をする」という運命に変えたということですね。その発想が妬ましいです。
「最近暇なのよ。」
「ま さ か、そ れ だ け の 為 に？」
「ええ、それだけの為に。」
「うわぁ・・・。」
　きまぐれもここまで来ると感心しますね。
「そんなこと言っていいのかしら？」
　そう言って取り出したのは・・・私の日記？
「二月十五日。今日師匠の部屋で（自主規制）な実験が行われていた。私は部屋で（放送禁止）をしていたが、いきなり師匠に怪しいおクスリを飲まされた。すると私の体から（禁則事項）が・・・。」
「ちょ、何読んでるんですか！」
「ふふふ、これがどうなってもいいのかしら？　主に新聞に載るとか。」
「くっ、卑怯な・・・！」
「その代わり、残りの人集めは私がしてあげるわよ。」
　何の代わりなんだと思わなくもないです。

　そして当日。球場に向かう私。途中でリグルさんに会いました。
「おはようございます。」
「うん・・・おはよう・・・」
　暗いなぁ・・・。まさかリグルさんも？
「あの…もしかして、レミリアさんですか？」
「うん。まぁ、だいたいそんな感じ。」
　この分だと十中八九他の人たちも脅されてるなぁ・・・。

師匠の弱みって何なんでしょうか？

その後、わらわらと私が呼んだ人達が集まりました。皆の目が据わっています。全員、物が賭かっているのは間違いないですね。
「集まったみたいね。」出たよ。おぜうさま。
一部の方から凄まじい殺気が押し寄せてきます。正直、怖いです。
「あらあら、怖いわねぇ。そんなに睨まないでよ、言伝があるだけだから。」
「嫌な予感しかしないよ・・・。」
虫の知らせという奴でしょうか。リグルさんが言います。
「貴方達がニートに負けた場合、ブツは没収と言うことで。」
「・・・・・は?」
「だってそうでもしないと手ぇ抜くでしょ。」
「ぎくっ!」
やはり全員やる気のかけらもないみたいですね。そして、
「絶対に、負けられない。」
誰ともなしに言いました。
「あとこれがメンバー割プラスαね。」

蓬莱NEETS（作者のネーミングセンスを憐れんでください。）
一番　中央　射命丸　文
二番　捕手　八雲　藍
三番　三塁　永江　衣玖
四番　右翼　星熊　勇儀
五番　二塁　伊吹　萃香
六番　一塁　蓬莱山　輝夜
七番　左翼　犬走　椛
八番　遊撃　洩矢　諏訪子
⑨番　投手　古明地　さとり

TEAM・もこたん（さくs・・・以下同文）
一番　右翼　上白沢　慧音
二番　遊撃　古明地　こいし
三番　中央　八意　永琳
四番　捕手　藤原　妹紅
五番　一塁　魂魄　妖夢
六番　三塁　チルノ
七番　左翼　リグル・ナイトバグ
八番　二塁　河城　にとり
九番　投手　鈴仙・優曇華院・イナバ

ルール
一、基本普通の野球と同じ
一、五回制

「・・・ま、こんなもんかしら。あとの三人はもうすぐ来るから。じゃ、私はこれで。」
お騒がせ吸血鬼が消えました。そして、その後すぐに現れたのは、魂魄妖夢、古明地こいし、河城にとりの三人。これで全員ですね。
適当にあいさつなど済ませます。すると妖夢さんが、
「今日は私の貞操の為にも負ける訳にはいかない・・・。」
・・・お一人だけ何か違う弱みを握られたようですね。まぁ、私には関係な・・・
「ふふふ、新薬・・・うどんげ・・・じゅるり・・・。」
くなかったです。リアルで貞操の危機です。
師匠の弱みが薬ということは分かりました。では、他の人たちはどうなのでしょう。聞いてみる事にします。誰かが「分からなかったら人に聞く!」と言っていました。
「設計図。」
「昆虫ゼリー。」
「飴玉。」
なるほど。バカはお菓子に釣られたという事がわかりました。
「もこたん。」
何言ってんだ、この先生。ついに狂ったか。弱みがもこたんってどういう意味だよ。
「けぇね。」
てめぇらもう付き合っちゃえよ。
・・・ふぅ、疲れました。反応に。
そんなこんなで時間が来、私たちは戦場に向かうのでした。
そして、冒頭に戻ります。

うどんげは、右手の白球を握りしめ覚悟を決める。いまさら何を言っても仕方がない、と。迎える打者は射命丸。

一球目・内角低め、ストレート、二球目・外角低め、スライダーであっという間に追い詰められる射命丸。ここで決め球、狂気の瞳が入る。周りから見ればただの遅い球。しかし、打者からはありえない変化をしているように見える。
　当然、打ち損なって転がす。一応、フェアではある。だがそこは幻想郷最速の射命丸。物凄い速度で一塁に向かう。が、
「甘い。」
　妹紅が一瞬で球を拾い、一塁に送球する。爆発的な速度を得た球は射命丸の横を掠め、妖夢のミットに入る。
「あやや、打ち取られちゃいましたか。」
　とても悔しそうな射命丸。向こうが人外なら、こちらも人外。常識が通用する場所では、無い。
　次は、八雲の式・藍である。式としては優秀な彼女。まぁ、いくら優秀でも、物理法則を無視した球を打てる訳もなく、邪飛止まり。
　続いて三番・衣玖。彼女が打席に立ち、一番最初にした音は、快音。狂気の瞳を物ともせず、流し気味に球を捉える。そして、一塁に向かって飛んで行ったライナーは、
　ガスッ！
「ぐはっ！」
　妖夢に、命中。そのまま倒れ込む。しかし、零れ落ちた球が地面に付くすれすれの所で、マジックハンドが伸び、捕球する。そしてそれはにとりのリュックサックの中に消える。
これで三アウト。チェンジである。
　迎える一回の裏。先頭は慧音。投手はさとり。そう、さとり。心が読めちゃう、さとり。大事なことなので三回言いました。心理戦主体の野球に於いて、これほど反則的な能力もない。あっと言う間に三球三振。
「流石はお姉様、だね。でも・・・。」
　言いつつ、打席に入るこいし。こいしの心を読める者は皆無。
「心が読めない姉様なんて、ただの小五ロリよ！」
　パキィン！
　お前はどうなんだと言われたら何も言えないであろう妹が打った球は一直線に飛んでいき、
　さとりの、第三の目に、命中。
　傍から見てると眼球に球が当たったように見えなくもない。
「痛たたた・・・。」
「ちっ、生きてやがったか、しぶとい姉様め。」
「何か言いましたか？」
「別に。」
　こいしの心が籠った一言は聞こえていなかったようだ。よかった。
　次はえーりん。どんな薬でも作れるという事は、ドーピングだって作れちゃうという事。
「見える！　私にも（球が）見える！」
　著しく上昇した動体視力で球を打つ。低い弾道で飛ぶ球は、
　またも、さとりを、直撃。
　その零れ球を萃香が拾う。だが一塁にはすでにえーりんの姿が。
「なんで？」
「ドーピング使ったんだから足が速いのは道理でしょうに。通常の三倍って奴よ。」
ドーピング使った人に道理とか語られても、と皆が思った瞬間だった。
　だが、後の二人が打ち取られチェンジ。
　二回表。先頭は勇儀。怪力の鬼相手ではほとんどの人が投げたがらない。打たれたら嫌だし。そこでマウンドに立つのは、
「あたい、さいきょう。」
　何も考えてない、バカ。
　思いっ切り投球するチルノ。球威、球速ともなかなかのものだが、強い球という事は、打たれた時の反動も大きくなる。快音が響き、球が飛ぶ。
　しかし、その球はある高さに到達した所で急速に減速し、落下する。
「ふぅ、なんとか間にあったね。」
　捕球とともに声を上げたのは、リグル。
　上空にはドーム状に蜘蛛の糸が張り巡らされていた。この糸で打球を受け止めたのである。
　ちなみに、蜘蛛の糸は強度で同じ太さの鋼鉄の五倍、伸縮性はナイロンの二倍。
　並大抵の事で切れはしない。
　はい。勉強になりましたね。

続く萃香に二塁打を打たれ、迎える打者は輝夜。輝夜である。
　チルノが一球目を投げた。すっぽ抜け、明らかにボールなのだが、輝夜は思いっ切りスイングする。
　捕手の、頭に。
　ガツンッ！
「いったぁ！コラテメェ輝夜！何しやがる！」
「あら、ごめんねぇ、妹紅。手が滑っちゃった。」
「この野郎・・・！」
　呪詛を吐く妹紅。そして、転がった球を拾って投げる。
　打者の、頭に。
　バコンッ！
「っっ！妹紅、やる気？」
「上等だ。ヒキコモリが。」
「自宅警備員の底力、見せてやるわ。」
「食らえ！『蓬莱・凱風快晴〈フジヤマヴォルケイノ〉』っ！」
「『神宝〈ライフスプリングインフィニティ〉』。」
　・・・冬の空にピチュン音の二重奏が響く。
　下らない事で残機を減らしてしまったようだ。
　次いで椛。飛んできたストレートにタイミングばっちりのスイングを当てる。
　そして、次の瞬間、球は真っ二つに。そう。物理とか常識とかその他諸々の要素を超越した光景が広がっていた。
「・・・え？・・・。」
　やった本人でさえ呆けていた。まぁ、そりゃそうだわな。バットで球ぶった切るって。どう考えても変である。
　そして妹紅が球であったもの×二を拾って呆けている椛にタッチ。三アウト。
　二回裏。チルノが打席に立つ。例によってさとりの能力。だが、
「え、なんで、心が・・・読めない！」
「読める読めないの問題じゃなくて、チルノは基本何も考えてないからね。無い物を読むなんてできないよね。」
　と、リグル。
　そして、「二度ある事は三度ある」ともいう。つまり、
「うぐっ！」
　本日三度目の打球直撃。いい加減しつこいと思う。
　しかも、たちの悪い事に球は凍り付いていた。最早鈍器と化した凶弾が命中。倒れ込むさとり。今度こそ起き上がる気配はない。
「まったく、しょうがないわね。」
　えーりんが瓶らしきものをもって近付く。さとりの口の中に中身を流し込む。すると、間もなく起き上がる。だが、市原〇子もというどんげは見た。瓶のラベルに「国士無双」と書かれているのに。またドーピングかよ。
　そうして通常の三倍の身体能力でめでたく復活したさとり。迎える八番・にとり。
　さとりは投球フォームに入る直前、高くジャンプする。そして、空中で投球しながら叫ぶ。
「ハイジャンプ魔球！」
　ひとつ分かった事がある。ドーピングを使うと物理の他に著作権まで無視できるらしい。
　絶対に打てない角度から高速で迫ってくる球。しかしにとりは、その球をいとも簡単に打ち返す。そのまま蜘蛛の巣のスキマを縫って場外へ。いわゆるホームランという奴である。
「ホーミングモード中だよ。」
　と、にとり。チートにはチートという事らしい。涼〇〇ルヒの〇屈第一話の宇宙人的な事をしたみたいである。いいのかな？主に著作権的な意味で。
　何はともあれ二対〇。その後の追加点もなく橙ジ。
三、四回とも追加点ナシ。そのまま五回へ。五回表、二死一・二塁。五番・萃香。これを抑えれば勝ち。だが。
　見た目がどんなに幼女でも、鬼は鬼。蜘蛛の巣をぶち抜いて場外へ。
　二対三。逆転である。続く輝夜。だけど敬遠。このままいくと妹紅と輝夜の残機無くなっちゃうし。
　次は椛。先程球を切り裂いた彼女がとった

方法。それは、バント。通常、刃物は引くか押すかしなければ斬れる事もない。なにより、裏をかける。気が付けば、椛は一塁にいた。

八番・諏訪子。見てくれは萃香並みの幼さを誇る。それに比例して、ストライクゾーンも狭くなる。つまり、コントロールが狂いやすくなるのだ。そして、いままで、このような状況に陥った時の致死率は百パーセント。だが、諏訪子だって神。ヘッドショットを狙ってるとしか思えない球をしゃがんで避ける。普通ならこれで済んだであろう。

投げたのがチルノで無ければ。

チルノは冷気をまとった球をなげていた。それがかすったということは。

すわこ　はこおってしまって　うごけない！

「そらよ。大丈夫か?」

妹紅が炎で氷を解かす。

「ふぃ、助かったよ。」

「Atai is the most stronger.」

チルノが二球目を投げる。諏訪子が打とうとした時、

「凍符・パーフェクトフリーズ！」

球が止まった。皆の頭にある魔球が鮮明に蘇る。だが、言わない言えない言いたくない。

「またの名を・・・トン○ール！」

言うなよ！

「何よ、うるさいわね。」

天の声に突っ込むな！・・・いや、落ち着け、俺。落ち着く時には素数を数えるんだ。

一、二、三、五、七・・・って、一は素数じゃねえ！・・・失礼、取り乱してしまいました。

そのまま打ち損なって三死。

五回裏。割と最終回。先頭は慧音。あたりはすっかり夜である。しかも今夜は満月である。つまり。

「うわっ・・・きもっ・・・・。」

「きもいとかゆーな。」

全身緑色の慧音が出た。EXモードである。色は量産型だけど。だってきもけーねだし。

半分獣の動体視力、膂力、その他は半端ではなく本日三発目の場外弾。同点である。

その後、一死一塁で四番・妹紅。彼女は打席に立つまで、ひたすらにバットに油を塗りつけていた。無駄にテカテカしているバットを構える。そして、打つ瞬間、バットに点火する。打つ。叫ぶ。

「炎○打撃～ふぁいやぁいん○くと～！」

うん。なんかもういいや。どんだけパクれば気が済むんだろう。

引火した打球は三遊間を破り、二塁打。

その後、五番・妖夢がシングルヒット、六番チルノが凡退。

二死満塁で迎える打者はリグル。そう。二死満塁。ドラマの様なシチュである。

さとりが投げる。投げた瞬間、リグルは構える。バントの型に。最終回二死満塁でバント。普通に考えてありえない選択。ある意味ロマンあふれる選択ではあるが。

コツン。

普通のバントの音がした。だが、ぐんぐん飛距離が伸びる。そして、そのまま場外へ。

そう。ここにきて伝説のバグ、バントホームランが発生したのだ。bugだけに。

サヨナラ勝ち越し満塁バントホームラン。口上ながっ！

こうして、いくらかの負傷者を出したカオスは終わったのである。

試合後、冒頭以来の再登場の空気のカリスマ、レミリアから、クスリとかゼリーとか色々返された。そして最後、うどんげの乙女の秘密を返す時、強風が吹いて、日記がそらたかくまいあがった。それは、烏天狗の前に落ちて、

「あや？　何ですか、これ？」

拾い上げた。

冬の空に、絹を裂くような悲鳴が響いたとさ。

（終）

〈作者コメント〉

皆様、はじめまして。初投稿です。そして駄文です。こんな表現もしつこく、方向性も定まってない物を読んで頂いた方、ありがとうございます。気付いたら投稿してました。読まれている頃には激しく後悔しているでしょう。反省はしていないでしょうが。それでは皆様、また会う日まで。

東方小話　-雪-

著者：社　蛍夜

「外は大雪。皆、大丈夫だった？…そう。それは良かった。さて、今夜こんなになって外に出れないね。どうしようか。
……あら、それは良いね。面白い話ね…そうね、それじゃあ、私が話そうかしら。そうね…」

※※※

白い景色に覆い尽くされた幻想郷。今の季節は冬だ。人間や、一部を除く妖怪妖精は防寒具を着込む程度の寒さだ。
そんな中、博霊神社の近くの茂み。そこに怪しい人影が五つほどあった。
「で、チルノ。これからどうするの？」
私、リグル・ナイトバグが隣の妖精に話しかける。すると、彼女はこう言ってきた。
「たまには…ってよくやってたけど、こういう暇つぶしもいいじゃない」
彼女、妖精のチルノは防寒具を付けずにそう言ってきた。そんな彼女の更に隣、私達の真ん中には一人の妖怪がいた。
「チルノ達はいつもこんな楽しそうな事してたの？　なら来年からは私が居る時にもやりましょうよ」
彼女、レティ・ホワイトロックはそう提案してきた。彼女は冬にしか会えない、私達の仲間だ。もちろん、防寒具などしていない。
そして、更に隣にも一人妖怪が居た。
「止めた方がいいんじゃない？　チルノ。せっかくのレティとの遊べる時間じゃない。」
彼女、ミスティア・ローレライはチルノにそう提案する。そして更に隣、最後の一人である妖精。
「そうだよ。また見つかってボコボコにされちゃうよ」
彼女、大妖精が…名前？……今度、改めて聞いてみるよ。さて、話を戻すよ。
彼女の提案を、話しかけたチルノではなく、レティが更に意見を言ったんだ。
「何言ってるの。神社に悪戯だなんて楽しそうじゃない。私はやりたいわ！」
「レティがそう言うからやるわよ！」
そのレティの意見でチルノがやる気を出してね、悪戯の決行が決まったんだ。
内容は極々単純。
賽銭箱に悪戯するんだ。
その時はたしか…中に小銭の形をした氷を大量に詰め込んで糠喜びさせせよう。だったかしらね。
作戦は順調に進んだわ。まずチルノが氷で賽銭を作ったわ。そして、私達が両手にいっぱいにその氷を持って、巫女が居ない事を確認すると賽銭箱に向かうの。そして、賽銭箱に持ってるものをがさっと入れたわ。
そしたら神社の奥から大きくガタンって音がしたの。大きな音だから聞こえたのは分か

るけど、流石に反応が露骨過ぎてね。
　私達は笑いを堪えながら茂みに戻ったわ。
そして巫女が来るのを待つの。
　それから何秒と待たずに巫女がとんできて賽銭箱を確認するのよ。
　まず持ち上げた時に重かったのが余程嬉しかったのか一瞬顔が綻んでね。中身を見た瞬間、急に愕然としてたわ。あのギャップが何とも…っと笑ってないで話の続きね。
　それからは一瞬の出来事だったわ。巫女がこっちを向いた瞬間…あれは般若の顔だったわね。そんな顔で泣きながら追って来たのよ。まぁ私達は間合いを開けてたし逃げれると思ったんだけどね、あの巫女空間移動して目の前に来た上スペルカードまで使ってきたわ。…流石に逃げきれなかったわね。でもあの巫女のあの時の愕然とした顔は今でも笑えるわ。

※※※

「以上で御仕舞。…んー、皆はあの時の顔を知らなかったからね。あまり面白くなかったかな？
　ん？　次の話？　そうね…」

（終）

〈作者コメント〉
　リアル大雪にイラッとしたので書いたです。
　文の書き方を変えたので、読みにくい方は掲示板で叩いてくだしあ。ゴメサ

ずっと一緒に　～ー0.5～

著者：壁々

　あらゆる花が咲き乱れたあの春、その花も散り始めたころに私は気づいた。私にずっとついてきている子がいることに。その子はずっと、ずーっと私の後ろにいようとした。
だから私は声をかけた。
「一緒に来る?」と

　花が散り終わるころに私は決意した。蝶としてはもうもたないであろう、この子を妖怪としようと。彼女はここまで生きることができたのだから、すでに蟲のもつ寿命をはるかに超えた存在であったから。この子ならいけるだろうと。そう思って、声をかけた。
「一緒に行こう」と

夏を楽しみ
秋を見て
冬を過ごし
春を迎えた。

春に浮かれ
夏に蓄え
秋に遊び
その間をずっと一緒にすごした。

　一緒に冬を越えようと秋の終わりに誓った。それなのに—彼女は別れをつげようとしている。
　ほかでもない、自分のせいで—

　だから、私は願った。
「一緒にいたい」と—

　リグル家では、ミスティア、ルーミア、チルノの3人が心配そうな顔で食卓を囲んでいた。
「…帰ってこないね、リグル…。何してるんだろう。」
「昨日の夕方出てったきりなんだよね、ミスティア?」
「うん…」
「これあれだよね、朝帰りってやつだよね」
　堅いものに頭をぶつけたような、3つの鈍い音が響き渡った。
「チルノ?言葉ってのは使いどころっていうのがあるんだよ?」
「ていうかそんな言葉知ってたのかー…」
「だって朝に帰ってくるから朝帰りなんでしょ?それぐらいあたいでもわかるよ」
「いや…まぁ、ね」
「朝帰りだとすると、私は誰と夜に一緒にいたことになるのよ…」
「リグルにそんな人はいないよねー」
「いないのだー」
「え、夜誰かと一緒にいなきゃいけないの、リグル?」

「うんまぁ、説明はめんどくさいから明日にでもね。とりあえず今日は…」
「「うわああああああ！」」
「気づいてなかったんだ…」
「え、いつから！？」
「朝帰りのあたりから」
「ただいまくらいは言うべきだよー」
「あはは、ごめん」
　そのなにげない一言で、3人は一様に目を丸くした。そして顔がほころんでいった。その急な変化にリグルはただ戸惑うばかりだった。
「…え、何？」
「ああ、自覚はないのかーやっぱり。」
「それだけ切羽詰まってたんだね。」
「リグルが笑ったの久しぶりに聞いたよ！」
「…あ」
「あの子が倒れてからずっと。リグルはいつも思いつめた顔してて。」
「雰囲気がもう、つらそうで見てられなかったんだから。」
「昨日…何があったの？」
「私のところに泣きついてきたから喝をいれてあげたのよ」
「「うわあああああああああ！！！」」
「…幽香さん。」
「え、いつから！？」
「リグルと同じタイミングよ。だいたいリグルはここに来るまでぐっすり寝てたんだから、私が運んであげたの。」
「ありがとうございます。いろいろと…」
「頑張りなさいな。」
「はい！　みんな、いこうか！」
　快活で明るい、久しぶりの笑顔で、リグルは3人に呼び掛ける。今日の夜へ向けて、最後の仕上げを行うために。そんなリグルの顔を見て、3人は口をそろえて言った。
「「「…どこに？」」」
　顔を真っ赤にするリグルの後ろで幽香が爆笑していた。

「…で、昨日は何があったのさ」
「それは私も聞きたいなぁ」
「隠し事はよくないのだー」
　蝶の子をつれてリグル達は森を出た。まっすぐと人里の上を通り過ぎ、竹林へと入った時に3人は昨日の事を聞いてきた。
「ん、まぁ…隠す事でもないけど……

～

「蟲の女王よ！　さあここでその答えを！」
　昨日、日も暮れかけていた太陽の畑で幽香はリグルを問い詰めた。彼女の知るリグルを取り戻させる為に、彼女の軸を取り戻す為に。
　彼女の強さを信じていたから。涙で顔をくしゃくしゃにして、苦悶の表情を浮かべるリグルをただまっすぐに見つめていた。そして
「わ…私は、私はっあの時私が出来ることをしてあげたつもりです！」
　リグルは声を絞り出した。
「1年半と少しの間っ…私はっ…彼女と一緒に…彼女と遊んでっ…彼女と暮らして…っ」
　嗚咽で途切れても。思い出すのが辛くても。リグルは一つ一つ声に出して。
「彼女と…楽しくっ…過ごしてきましたっ！けど…けどっ…ひぐっ…」
　すこしずつ確実に、飲み込んでいた答えを吐き出していく。
「けどっ…私は…それしかしなかった！」
　リグルは顔を上げた。訴えるように、すがるように、幽香の目をまっすぐと見つめて。
「………」
「それしか…もっと他に…できたはずなのにっ…あの子の為にっ…」
「それが…出来ればっ…あの子は…あの子はこんなことにならなかったのに！」
「全部…全部全部全部！」
「私のせい…ねぇ」

　パァンっ……

　あかね色の空に響き渡る乾いた音。
「……え？」
　リグルは何をされたのかわからなかった。頬がじんじんと痛い。
「貴女のせいかどうかは貴女が決めることなのよ。」
「…だから…私は…」
「貴女は自分で『できることはやった』と言っ

たはず。」
「…あ」
「過去に対して反省することは無駄ではないけど、悔やむ事は意味が無い。貴女はその時の貴女が出来ることをやった。その事実は変わらないの。後から見たときその事に対してどうこういうのは所詮結果論でしかないわ。大切なのは今なの。」
「…幽香…さん…」
　幽香はまっすぐリグルを見つめて。リグルはしっかり幽香の目を見て。思いを送り、受け取る。
「だから自信を持ちなさい。貴女はいつでも出来ることをやってきた。その強い信念で、その優しい心で。これからもずっと…過去を活かして、今できる事を全力でやりなさい。それが貴女の下にいるモノたちへの何よりの示しとなるはず…」
「……っありがとう…ござい…ます…」
　そう言ってリグルはふっと目を閉じた。安らかな寝息を立てるその顔を見ながら、幽香はそっと微笑んだ。
「しばし眠りなさい。明日は全力以上の力がいるでしょうからね…」

～

「…で、気づいたら家の前だった。」
「ほえ～…」
「あの人、リグルには優しいんだねぇ、あたいはあんまりいい思い出ないなぁ…」
「そっか…そうなんだ…。」
　話し終えたとき、リグル達は竹林を歩いていた。
　迷いの竹林と言われるここも、あくまで迷う原因は視覚に頼って目的地へ向かおうとすることにある。冬とはいえ、地中で冬をすごす虫たちは数多くいる。リグルにとっては彼らの声を目印にしておけば一度行った目的地へは迷うことはない。声を聞くために歩くしかないため、移動は遅くなるが速く飛んで迷っても意味がない。
　事実、リグル達はまっすぐに目的地である永遠亭まで到達することができた。

「こんにちはー」
「あら、リグルと…その他御一行ね」
「その他とはなんだー！」
「なんだー！」
「お客として来たことがある人は覚えているのですけどね、弾幕だけではどうにも覚えられなくて…」
「えぇー…あんた天才って名高いんじゃないのー…」
「天才は必要のないことは覚えないものよ。で、リグルにはこれ。」
「はい、ありがとうございます。」
「……ふふ、いい顔をしてる。悔い無く終われるようにね。」
「はい！」

「で、さっきの薬何？」
「2日くらい前に手順は説明したじゃん？これはルーミア側の行動隊で使うもの。チルノは私と…って…チルノ、ちゃんと覚えてるよね？　やること。」
「さ、流石に大丈夫よ、そのくらい！友達の頼みを忘れるわけないじゃん！」
「ならいいや、信じるよ。ミスティア、ルーミアも大丈夫だよね？」
「当然よ！」
「任せて！」
　竹林から出ると葉に遮られていた光が5人を包む。日が上がり、昼時も近くなっていた。
　空を見上げて、一つ伸びをして、リグルは笑顔で号令をかける。
「よし、なら今からは特にやることもないね！最後だし、遊ぼう！」

　同じ頃、博麗神社。慧音は霊夢からことのあらましを聞かされていた。
　人間に対する物取り被害の犯人がリグルであること。リグルの周りに何かいるということ。そしてー
「…新月の今夜だと？」
「ええ、間違いない。リグルが仕掛けてくるとしたらここしかない。」
「何故だ、妖怪は満月の時が一番強いのだか

ら…」
「妖怪が一番強い時期、あんたが守る人里に何かを仕掛ける事は出来ないわ。」
「…そうか、私が無力な時、か…。くそっ！」
「何を仕掛けてくるかは正直分からない。だから、来たら叩き潰す。今夜はずっと人里につきっきりでいるわ。」
「…今夜？今からではなく？」
「…昨日の昼頃から半日がかりの弾幕勝負してね…疲れがとれてないのよ。今から少し寝たい。」
「…徹夜での警備になるだろうしな、わかった。私はここにいるよ。どれくらいで起こす？」
「日が傾いたら」
「…少し、なのか？　それは。」

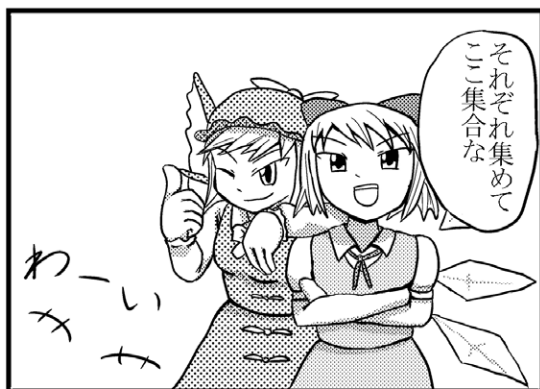
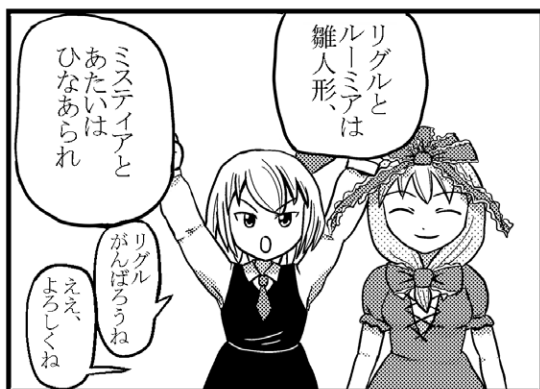
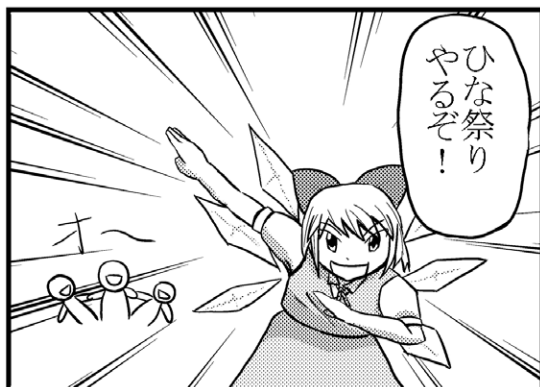
萃香から得た情報は、萃香の予想以上に霊夢に大切な情報を与えていた。蝶の妖怪、それもつい最近に急成長をした不安定な存在であるというその情報、そして物盗りのペース。不安定さから来る妖怪としての生命の危機が来ている可能性は十分にある、そう考えさせる程のリグルの焦り、そして近づいてくる新月の時。
　妖怪の利点である月光による妖力のアップを捨てる理由は、当然慧音の能力にもあるが、それ以上に妖怪のもう1つの利点、夜目が人間より遥かに効くことにある。
　弱っている妖怪を手っ取り早く立て直すには、人間への直接干渉が一番楽である。人里で何かしたいのであれば、人間に対して楽に優位に立てる時がいいのは自明だ。
　以上のことから、リグルは必ず新月、すなわち今日の夜に何かを人里に仕掛けてくる、という読みまで霊夢は到達したのである。

　同じ頃、地底。
「伊吹の萃香…という鬼がこの店にいるわね？　出しなさい。」
　幽香はリグル達を見送った後、地底へと向かっていた。昨日、リグルが自分の元に転がり込んできてから、幽香はずっと萃香の居所を探っていた。リグルが寝付いた後に見渡してみれば、神社で派手に続く弾幕戦闘、そこに求める人物の妖力があった。終わった後にすぐ捕まえても良かったのだが、捕まえる前にまっすぐ萃香は地底へと潜ってしまった。夜に迫って、朝のリグルの目覚めに間に合わないのを嫌った幽香は、今このタイミングで萃香を追ってここへ来たのである。
「あー、少々お待ちを…萃香様ーなんか幽香とかいう妖怪が呼んでますぜー！」
「いや、もうわかってるよ」
　店員が中に呼び掛けを行った時、すでに萃香は幽香の背後へ姿を表していた。腰を抜かす店員には一瞥もくれず、幽香は萃香を見据えて話しかける。
「あなたに頼みたいことがあるわ。ちなみに拒否権はない。」
「…あー、一応何を頼みたいのかだけ聞かせてくれる？」
「リグル・ナイトバグに関して。」
「うぐ……確かにないなぁ、その件に関して拒否権は…」
「あら、意外。素直なのね」
「あんたの知らないところで私にもいろいろあってね…彼女には借りがあるんだ。」
「ああ、それなら遠慮なく。貴方には萃めてもらいたいものがあるのよ」

（続く）

〈作者コメント〉
　リグル、霊夢両者の準備が整いました。いよいよ、次号から全面対決。そして陰で動く幽香の狙いは…？　そして蝶の子の運命は？
　期待して待っていてくだされば幸いです。

3月号テーマ
雛特集
『人形に囲まれる日』　涼音 奏
1:雛ちゃん俺と代われ
2:リグル?俺と代われ
3:なんとどっちも俺だ　--http://rshk.uijin.com/

これはひどいと言われたくて

preludenano

じゃどうだよ
チョココーティング
ひなあられ

明日ハレの日、
雛の昨日
Step
キャッキャッ
キャッキャッ
みんな～、
石畳の所は危ない
から遊ぶなら湖の
方にしてね～
はーい
……、妖怪にも子供
って居るんですね
へぇー
まぁ、諏訪子も
あんなだしな
湖
――あ、今、湖には
諏訪子様がいらっしゃる
けど、大丈夫かしら？ 早
おいおい、
いくら諏訪子(あいつ)だって
あんな雛鳥相手に喧嘩を
売る程子供じゃない…と思う 神
……けどちょっと
様子を見てくる
――三人いっぺんに相手してやるよ、
かかってきな、嘴(くちばし)の黄色い雛(ヒヨっこ)たち

闇符ディマーケイション

ピョらーン

♪

雪符ダイアモンドブリザード

あう~~

蠢符ナイトバグトルネード

神具「洩矢の鉄の輪」

わぁぁぁっ

わ～

さぁ、次はどうする？

ぐぅ…

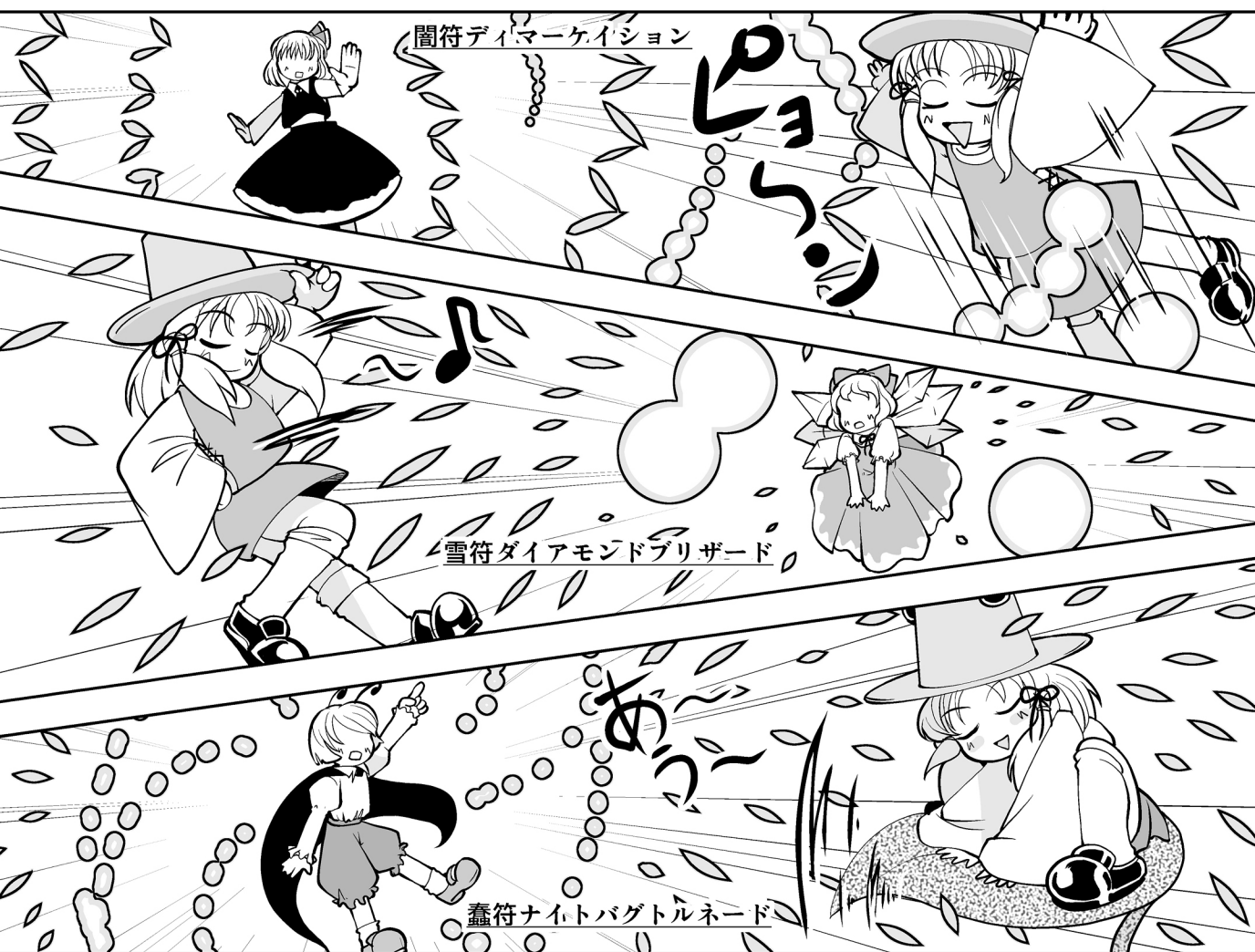
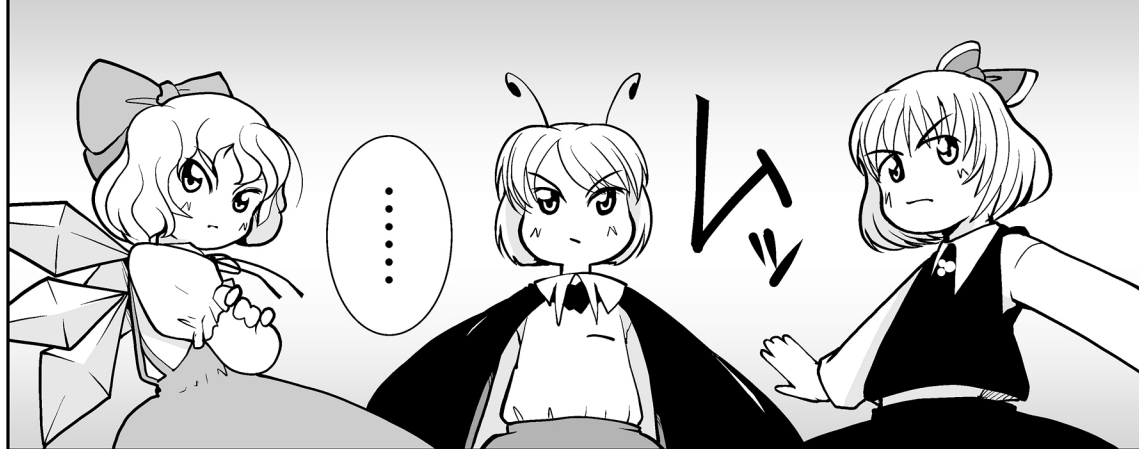
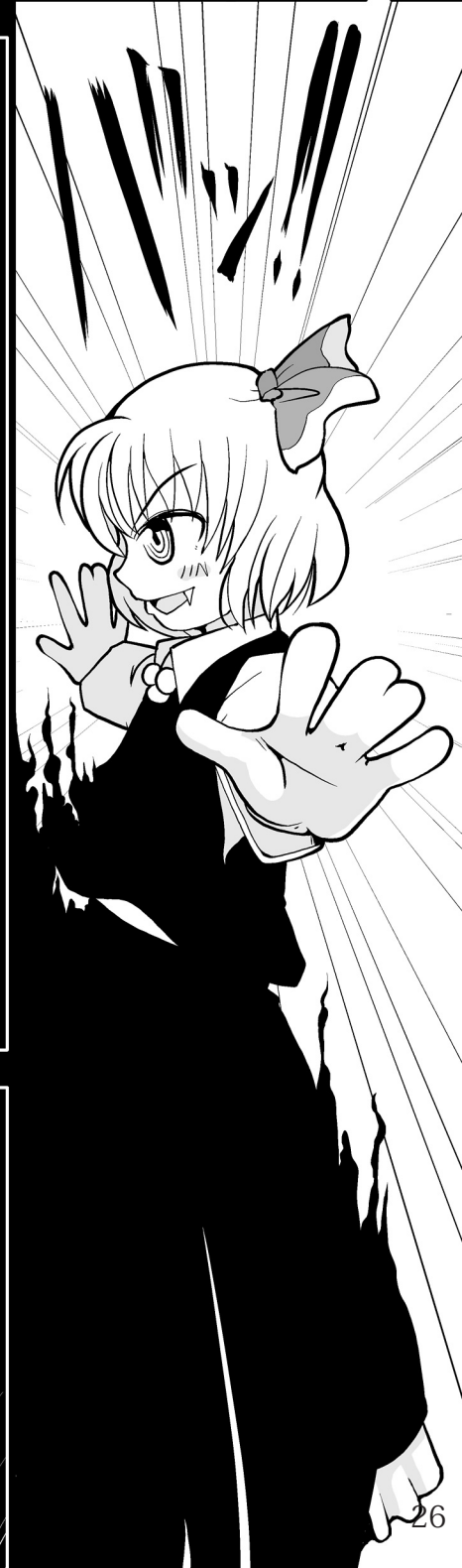
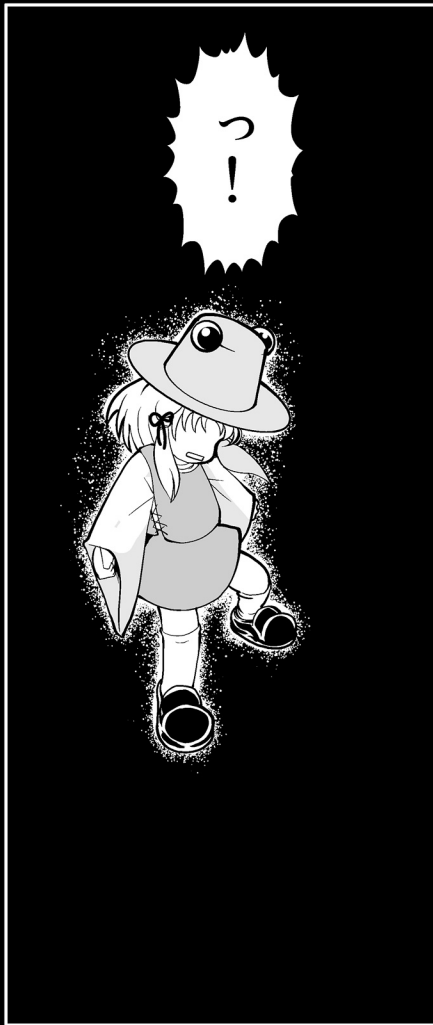
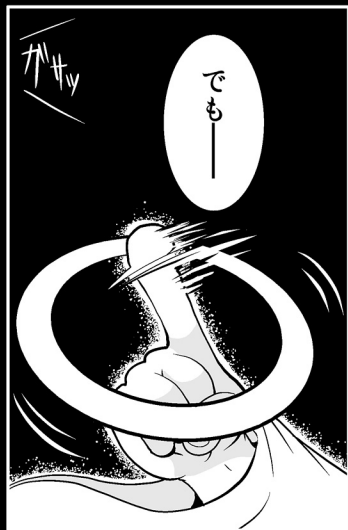
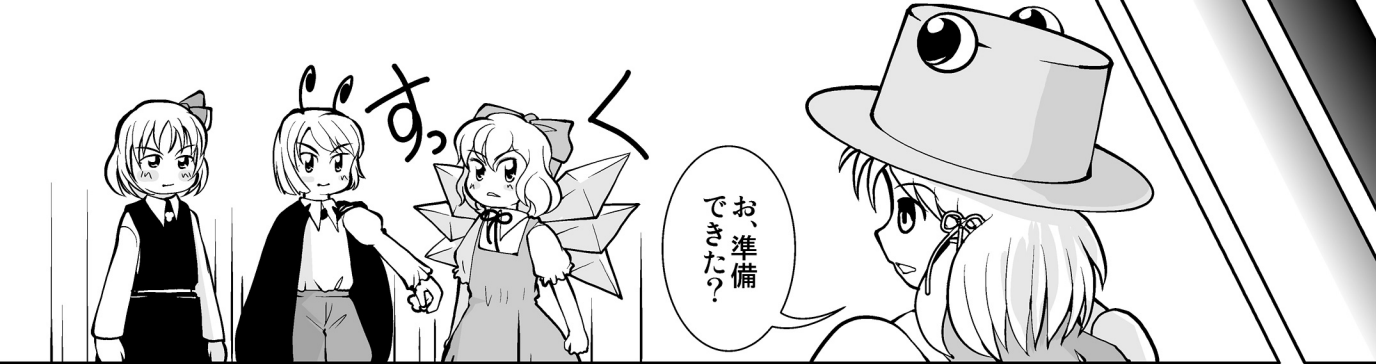
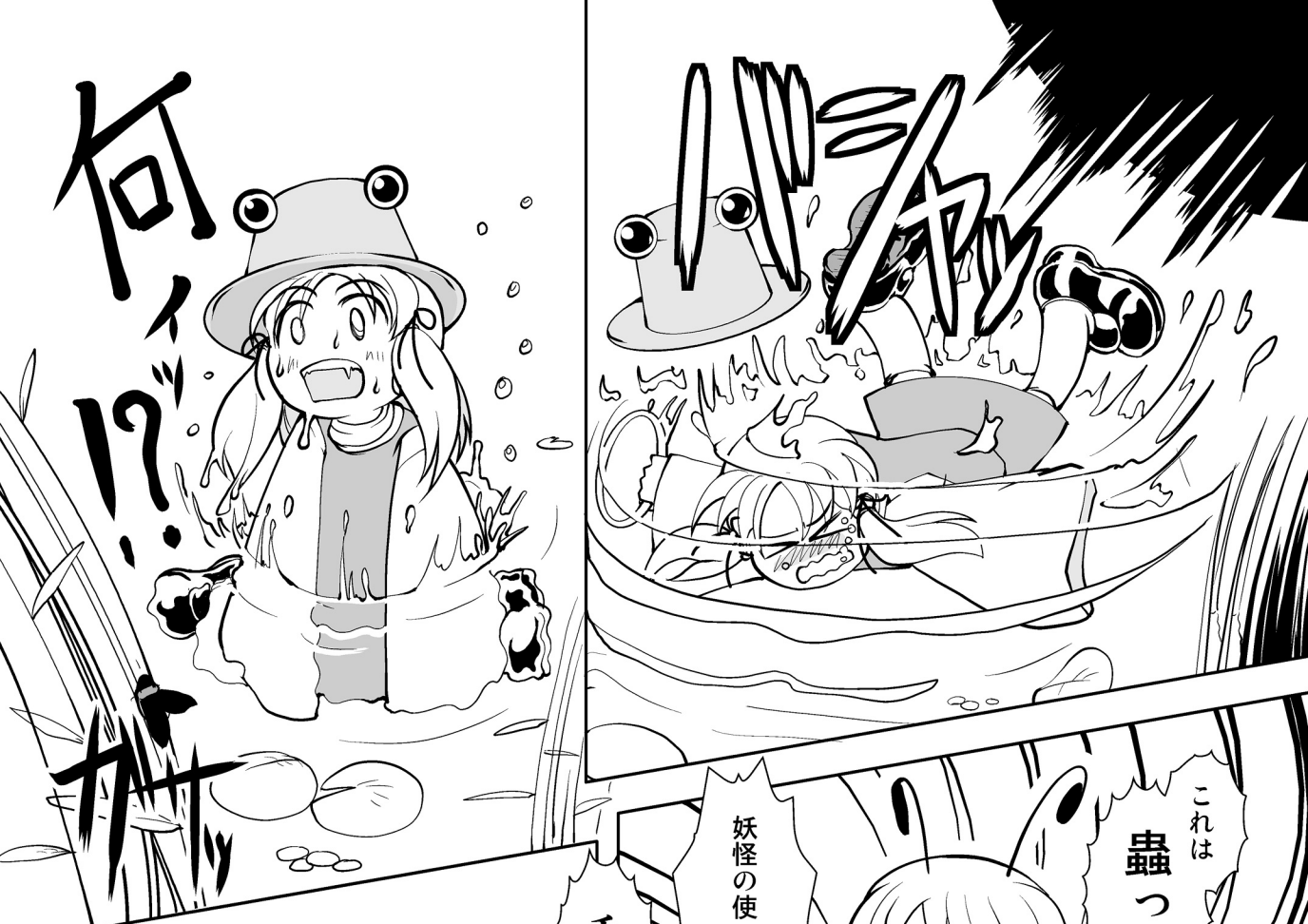
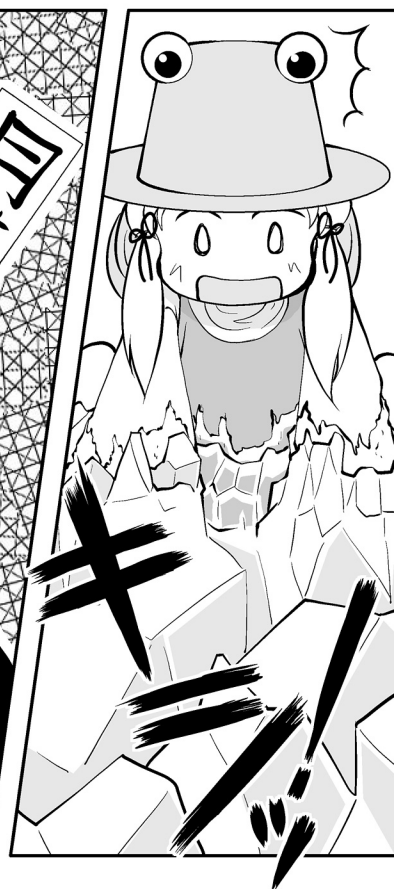
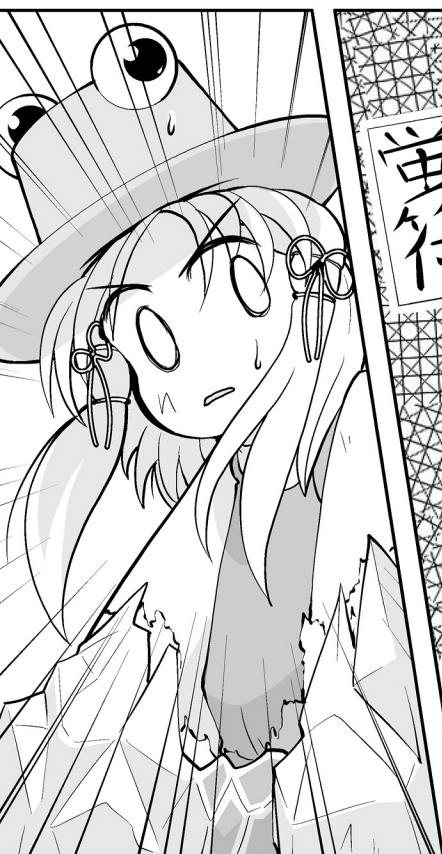
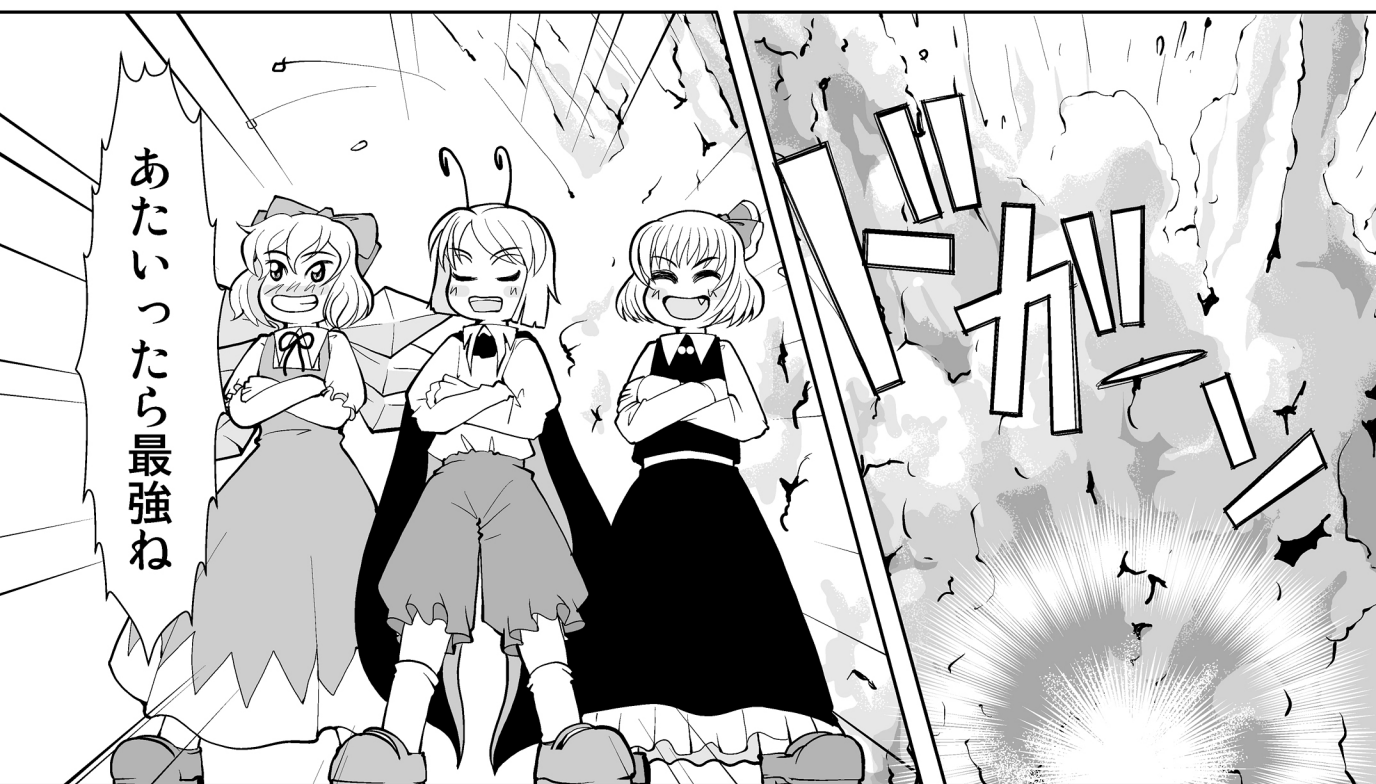
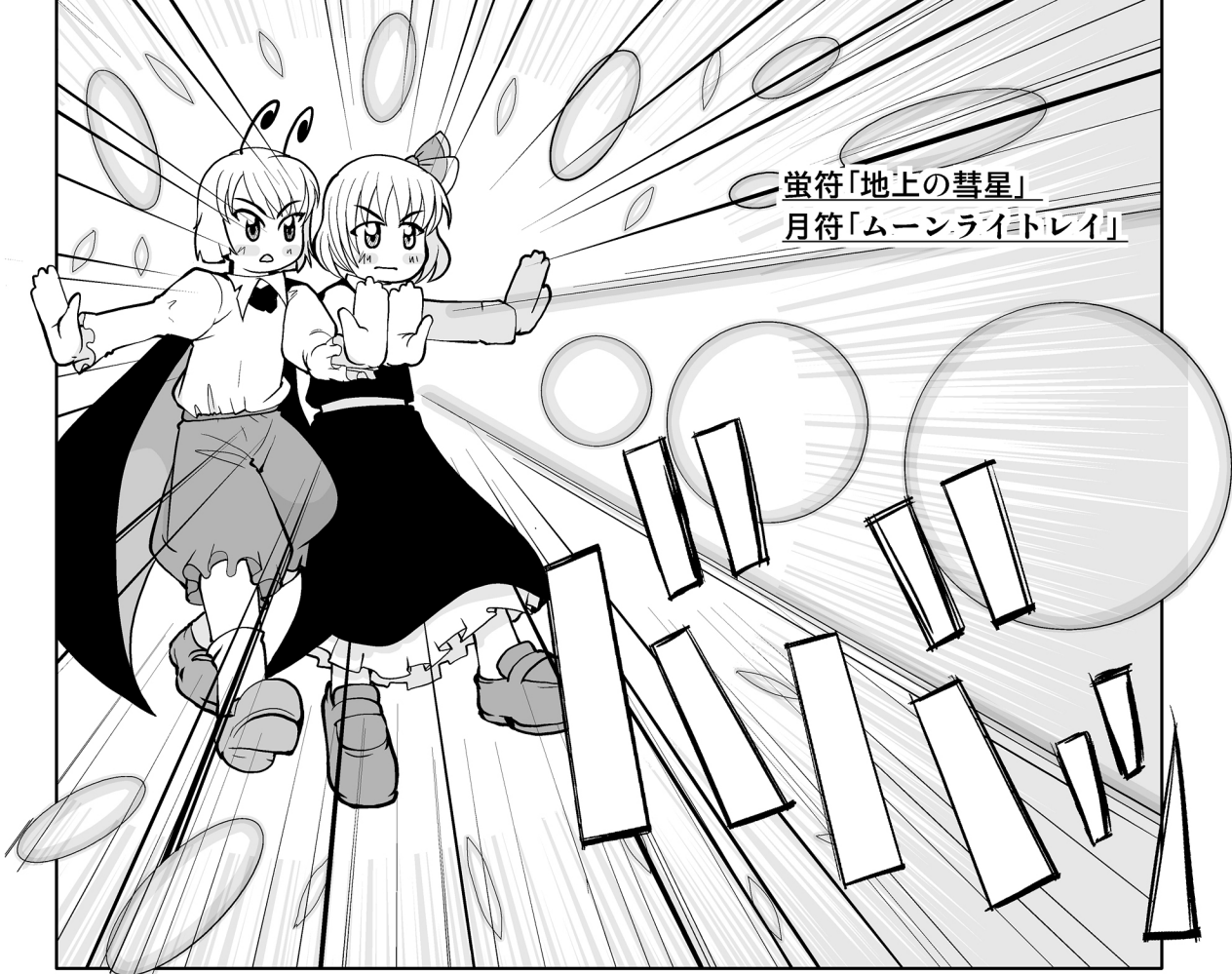
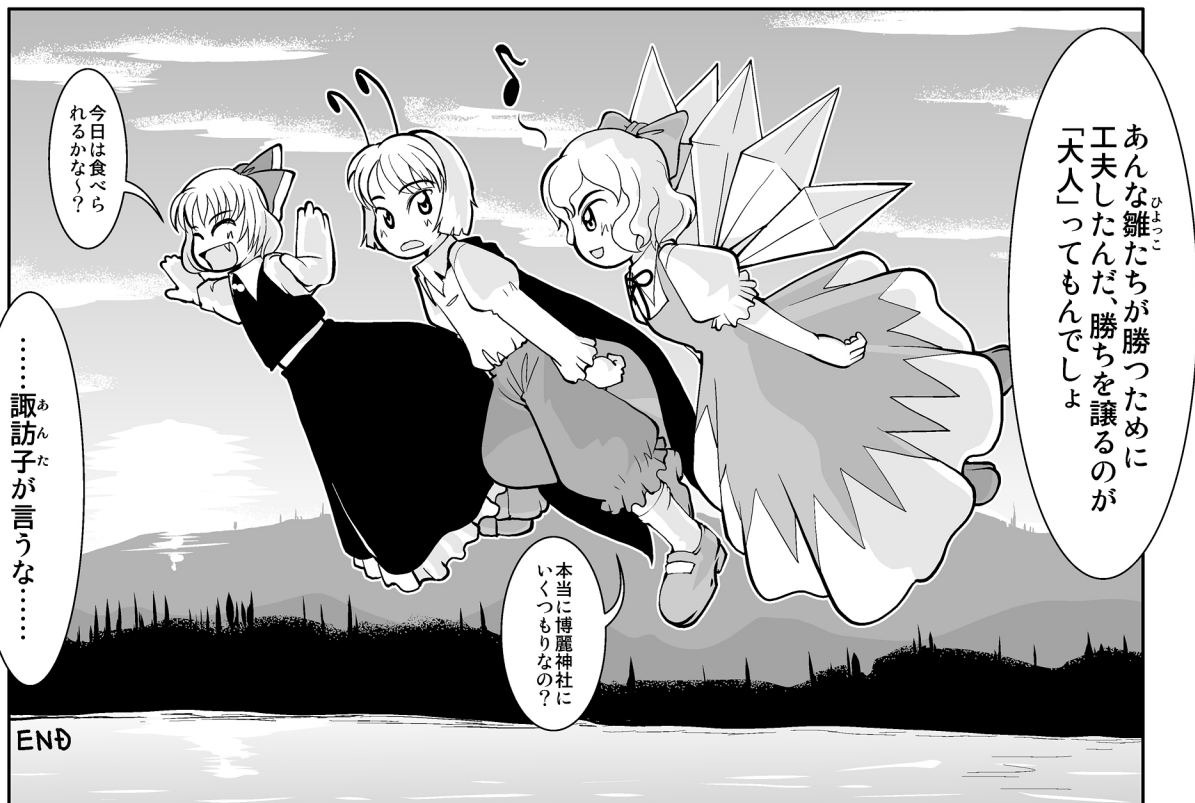
お、準備できた?
すっく
バッ!!
っ!
——なるほど面白い力だね
でも——
ガサッ
そこだッ!

バシャッ
何イッ!?
ガサッ
これは蟲っ!?
妖怪の使い魔か!!!
チルノっ!
凍符

パーフェクトフリーズ!!
ピシピシッ
キン!
月符
蛍符
今度は逃がさない！

蛍符「地上の彗星」
月符「ムーンライトレイ」
ドドドドドドッ
ドーガーン
あたいったら最強ね

おらしっ
霊夢に神様に勝った事自慢しにいくぞー
ずんっ

おーっ
フワッ
やれやれ
坤を操る諏訪子を氷で封じられるわけがないだろう
お祭り(ハレの日)なんだから大人気ない事言うなよ
ひょいっ
でも少しは当ったヨ♡
あんな雛(ひよっこ)たちが勝つために工夫したんだ、勝ちを譲るのが「大人」ってもんでしょ
今日は食べられるかな～？
本当に博麗神社にいくつもりなの？
……諏訪子(あんた)が言うな……
END

この作品には虫描写や写真が含まれています。

蟲の手帖

描いたん HOUSE
③月号
2010 MARCH

■前回のあらすじ
上から来るぞ、気をつけろ！

！
ー…神様？
厄神様
何をしてるの
あら
ぱしゃ
珍しいお客さん
こんにちは
今日は私に
何のご用かしら
とん
厄払い以外に
何かあると思う？
あー
手土産
それも
そうねー
ふわ
するり
それはともかく
こんな寒い中
何してたの？
あの大きな石は
なぁに？

ー…これニンギョウトビケラの幼虫が作る巣だよ この見事な形からすると石人形って呼ばれるものね

人形?

あら お仲間なのね!

山口県は綿川産と見た

不思議な自然石
産・岩国石人形
300年の伝統

七福神石人

何といえばいいかー…
あなたは自分に降りかかる厄を
昇華する力に長けてるの

トー

さー

しばらくお待ちください

あなた言うほど
自分は不運だなんて
思ってないんじゃない？

おしゃれをしよう！
描いた人：巳
もう少しオシャレ…
してみたらいいと思うのだけど…

・・・え？

まずこの服！！
男の子っぽいわ
いやー楽なんで

そしてその髪！！
長いと邪魔だし…

それでも月バグのヒロインですかっ？！
キッ
えー
いきなり言われても…
それから
――数分後

えっと、どうかな・・・

似合う…？

モジ

いける・・・

いけるわ！

ガシッ

モジッ

これで次回の主役はあなたも同然よ!!

本当ですかっ!?

※人気投票も上位確定よ!!

私、頑張ります！

※残念でしたね ;w;

別名　勘違い編

今月は雛祭りというのがあるらしいよ！
ふむ
そうなのですか

じゃあ雛さんを呼んで何かしたほうがいいのかな？
祭りというからには彼女は忙しいのでは？呼べますかね？
回る

ほたりぐる
～雛編～

じゃあ暇そうな苺でも呼んでくる？
どなたですか
せめて上手く描いてくださいよ

ならば私が雛さんに！
何があってそこまでさせるんですか

ご主人チョコは？
何の話だい？

雛

ヒナ

Piyo

Piyo

楽屋ウラ的何か。

描いた人
草加 あおい

ほんとすいません(汗)

徹夜で弱っていたようです。

リグると!
厄のおねえさん

最近、いい厄を吸ってないわ…
どこかに不幸な子がいないかしら…

ガッ

リグル君、おひさしぶり～
リグル君を困らせるわる～い厄は、おねえさんがちゅっちゅしちゃうぞ～
わぁ！厄のおねえさん！

お、おねえさんは人間の厄を集めるんじゃあなかったの…？
キミみたいな子のおいしい厄なら大歓迎なのだわ
いいのよ～

あ～

もーリグるん！
ドカン
きゃーリグル君！
でも厄おいしいです

おわり

流し雛

著者：悠奈

　三月、幻想郷も桃の花がちらほらと咲き春が少しずつ近づいてきているのが感じられた。その日、蟲の妖怪である私、リグル・ナイトバグは友達と川辺で桃の花見をしていた。

「皆見てー!桃の花の氷漬けだよ!」

「チルノちゃん、まだ咲いてた桃の花が可哀想だよ・・」

「そんなことより私の歌聴いてるのー!?」

「料理が美味しいのだー」

　・・・なんというか、まさに馬鹿騒ぎである。お酒が入って気持ちが昂っているのだろうが、すでに桃の花は無視している気がする。そうやって落ち着いて対処しているかのように見える私はというと、寝込んでいる。お酒が入りすぎたのか、気持ちが悪い。

「いいから私の歌を聴けー!!」

　ミスティアが自棄になって叫ぶ、頭に響くよぉ

「料理〜♪」

　横ではルーミアが料理を食べ続けている。匂いがキツイ・・・

「あ〜!ルーミア一人で食べすぎ!あたいも〜!」

　チルノが横に来て騒ぐ、だから頭が・・・

「むが〜!早いもの勝ちだもん!」

　ルーミアが更に速く食べるのを見てチルノが騒ぎ出した。

「ひえぇ・・・」

　私は呻くことしか出来ない

「み、皆静かにしようよ、リグルちゃん気分悪いんだし・・・」

　大妖精が言ってくれるが、他三名は聞く耳もたず。

「うー・・・」

「リグルちゃん、ちょっと離れた場所で休んだ方が・・・」

「うー・・・そうする」

　私は何とか立ち上がってその場を離れることにした。

□

「あぅ・・・」

　川を少し下って、皆の声が聞こえないところまで辿り着いた。

「・・・ふぅ」

　川辺に座り込み、水を飲む、うん、甘い。この川の水はいいものだ。

「しばらくここにいさせてもらおうかな・・・」

　そう呟いて皆の居る川上を見る相変わらずの馬鹿騒ぎをしているんだろうなぁ・・・と眺めている

と川上から何か小さな物が流れてきた。

「・・・?なんだろう、桃・・・じゃないよね?」

　その物体はゆっくり、ゆっくりと川を下って私も近くまで来た。私は頑張って立ち上がり、その物体を拾うため、川に入った。

「・・・人形?」

　近くで見ると小さな船の上にちょこんと可愛らしい女の子の人形が乗っているのがわかった。

「どうしてこんな所に・・・?」

　精密に作られているこの人形を誰が川に捨てたんだろう?いや、船があったから捨てた訳じゃないのかな?私の疑問は止まらなかった。しかし、可愛らしいこの人形をただ流すのには勿体無い。

「貰っちゃって・・・いいよね?」

　どうせ誰も見ていないし・・・

「おーい!リグルー」

　その時チルノがこっちに向かって手を振りながら来るのが見えた。私は咄嗟に人形をポケットにねじこんだ。

「あ、どうしたの?チルノ?」

　私は何事もなかったかのように話かける。

「リグルもう大丈夫ね?ならさっさとこっち

きてあたいの味方しなさいっ！」

そう言った瞬間、川上から今度は弾幕が飛んできた。

「皆私の歌を聴け〜！」

そういいながらミスティアは弾を撃ちこんできた。

「あんたの歌より、料理の方がいいもんね！」

チルノはそれに応戦する。

「・・・はぁやれやれ」

流れ弾に当たりたくないので、チルノ側について応戦した。途中でチルノがこけてから基本私一人で戦っていたのは何故だろう。因みにその時大妖精は木の裏に隠れて、ルーミアは闇を出して料理をたいらげていたそうな。

□

「それにしても可愛いなぁ・・・」

チルノ達と別れて自宅に戻った私は椅子に座って川で拾った人形を眺めていた。所々が塗れていたり黒く汚れているが、それはとても精密な作りであった、あまりに精密で少し不気味に感じる程だ。

どうして川からこんなものが流れて来たのかの疑問が止まないが、考えても答えは出てこない。所詮頭は蟲頭だもの。

「咄嗟に隠しちゃったよ、まぁ皆にこんなものを持ってる私を見られたら笑われるだろうし・・・」

自分はどちらかといえばこういう人形は似合わない・・・と思っている。だからチルノが来た時に隠したんだろう。しかし、疑問は止まない。明日にでも川上の方を調べよう、勿論一人で。今日は大人しく寝よう。私は机の引き出しに人形をしまって眠りについた。

□

翌朝、昨日の酔いからか、少し体調が優れないが疑問を解決するために私は川辺へと向かった。宴会の後もすっかり片付いており、静寂を取り戻していた。私は昨日人形を拾った所へ行く。そこには何も無い。昨日のように人形が流れてくることもない。私は川の上を飛びながら川上へと向かった。

川は穏やかに流れている。その上をふよふよと私は飛び続ける。途中何度か蟲達の様子も見ながらだったので思ったよりも時間がかかった。陽もかなり照ってきたお昼頃、、川が途切れた。そこには何も無い。

「わからないままかなぁ・・・いや、もうちょっと行ってみようかな」

私は諦めず周りを調査に行った。しかし、見えるのは全て木、木、木、家、木、木・・・

「家？」

私は視界の端に映った違和感を確かめるべく振り向いた。確かにそこには家があった。

A）なんだかお店みたいな家だ。

↓ 43ページ（A）まで飛ぶ

B）森の中の少し不気味な家だ。

↓ 46ページ（B）まで飛ぶ

（A）

「こう・・・りんどう?」
　何処かで聞いたことのあるような名前だ・・・何処だったかは結局思い出せないが、とりあえず害が無い所である、と記憶しているから安全なのだろう。
　もしかしたら、人形ってここの人のかも・・・
　そういう思いが頭をよぎった私は扉を叩いた。
コンコン・・・
　音が響いて数秒後、中から足音と共に声が聞こえた。
「・・・ここの扉がノックされるのも珍しいな」
　その後すぐに扉が開いた。
「おや、君は初めて会うな。どなたかな?」
　その家の主であろう、メガネをかけた男性はそう言った。
「あ、あの、私リグル、リグル・ナイトバグです」
「おやおや、久々だな、こういうちゃんとした挨拶は、最近は無断で入ってきたり、扉をぶち壊して入ってきたり・・・おっと失礼、僕は森近霖之助だ。まぁ立ち話もなんだ、中に入りなよ。お茶くらいは出そう。」
　そう言って霖之介さんは中へ戻って行った。私は黙ってついて行った。

◇

　中は本当に色々な物で溢れていた。小さな物、大きな物・・・どれも見たことがないや。私は用意された椅子に座ってキョロキョロと周りを見渡していた。
「どうぞ」
　私が回りを見回している間に霖之介さんはお茶を入れてくれた。
「いただきます」
　一口啜る
「あ、美味しい」
「この前どこぞの魔法使いが代金の変わりにおいていった物なんだが、御口にあったようでよかったよ」
　営業スマイルというか、いい笑顔をこちらに向けてくれる霖之介さん。初対面なのに親しみやすいかも・・・
「で、用件は何かな?」
「あ、そうだ。あの、これ・・・」
　私はポケットから人形を取り出して机の上に置いた。
「これは・・・」
「昨日川に居たらこの人形が川上から流れてきて拾ったんです。それで今日川を上って行ったら霖之介さんの家があって、もしかしたら何か知ってるかもって思ったんですけど・・」
　私が言い終わると同時に霖之介さんは腕を組んで少し難しい顔をしながら言った。
「知ってるも何も、これを川から流したのは僕さ」
「え?」
　私はきょとんとした顔をした。
「これはね、外の世界から流れて来た雛人形という物らしくてね、文献で調べたらこれは三月三日に飾っておいて、その後川に流してしまう、という行事の物らしいんだ」
　一息ついてお茶を飲む霖之介さん
「そうですか・・・こんなに綺麗に作られてるのに流すのなんてちょっと勿体無いかも・・・」
「まぁその為に作られたみたいだし、もう一つ大きな意味があったんだけど、何だったかなぁ・・・ド忘れしてしまったよ」
　ハッハッハと笑う霖之介さん。私は手の中にある人形を見た。
　それは本物のような黒い髪
　人が着れそうないい素材の美しい着物
　綺麗に作られた肌
　・・・やっぱり流すのは勿体ないなぁ
「あ、じゃあこれ霖之介さんの物なんですよね?」
「まぁ、そうなるね。今は君の所有物となるが」
　そう言ってお茶を啜る。
「じゃあこれ返します。私が持ってても勿体無いし・・・」
「勿体無い?どうしてだい?」
　首を傾げながら訊ねられた
「だって、私に不釣合いだと思いませんか?」

「不釣合いかな？人形は僕みたいなのじゃなくて女の子に似合うと僕は思うんだが」
　不思議そうな顔をしてこちらを見る霖之介さん。私はうつむいて言った。
「私とこの子とじゃ美しさが違いすぎます。この子はこんなに綺麗だから、もっと綺麗な人か妖怪が所有するべきなんじゃないでしょうか。私のように、その、可愛い物似合わないと思うんですよ・・・」
　普段からたまっていた自信の無い自分の容姿への不満が口から出て行った。霖之介さんの笑顔で心を許してしまったのだろうか。初めてあった人に私は何を言ってるんだろう・・・
「・・・まぁそうなのかもしれないね」
　私は顔をあげて彼を見た。その顔は真剣そのものだった。
「君が自分に不釣合いだと思っていれば何時までたったって不釣合いだろう。何故なら周りもその気持ちを自然と察してしまうからね。でも、君が自分に自信を持って、その人形を堂々と持っていたらどうだ？人に隠れて持ってたら人に見られてないから理解もされない。でも堂々と持ってたら違和感なんてない。それに理解してくれる人も出てくるだろう。」
　一気に話す様子を見て私は呆気に取られていた。案外饒舌なんだなぁ。というか、初対面の人にこんなに真剣に話をしてもらえるとは思ってなかった。彼は湯のみのお茶を一気に飲み干して、急須に手を伸ばした。
「いいかい、その人形と君が不釣合いなんて君が決めることじゃあない、見る側の人が決めるものさ。君は君がしたいことを、君らしいことをすればいいのさ。それを見て何とも思わない人もいれば、不快に思うひともいるだろう。しかしそれと同時にその姿を認めてくれる人もいるってことだ。」
　急須にお湯が無くなっていることに気付いた彼は席を立ってお湯の入った薬缶を取りに行きながら話す。
「今日会ったばかりの君にこんな説教じみたこと言うのもなんだが、やってみないことで諦めるんじゃない。」
　薬缶から急須にお湯を注ぎ、急須に蓋をして彼は薬缶を元の位置に戻して座った。
「君には君の価値、個性があるじゃないか。皆違う、だからこそ皆良いんじゃないか」
　私はただ黙って彼の眼を見て聴いている。
「君も女の子だろう？人形が似合わないなんてことはないさ。・・・魔法の実験道具とかにしなかったらね」
　最後の方はよく聞こえなかったけど、なんかこの人妙に恥ずかしいこと言ってるなぁ。
「どうしてそんな真剣に話をしてくれるんですか？その・・・今日会ったばっかりの私に」
　私は下を向いて呟いた。
「・・・ほっとけないのさ。自分の気持ちに嘘をついている人を見るのはね。」
　私は彼の眼を見た。彼は相変わらず真剣そのものだ。
「親と思想が合わなくて、帰るところを無くしてしまった人を僕は知ってるからね。」
　彼はそういいながら湯呑みにお茶を注いだ。
「その人は自分に嘘をつくのが嫌いでね。あまりに自分に正直すぎて周りは少し迷惑しているが、本人は楽しそうだ。自分を自分で縛っちゃいけないよって話さ」
　私は彼の眼を見ていた。真剣だが、何所か穏やかな雰囲気を見せる彼の姿は寛大な心を持った一人の父親のように頼れる存在に見えた。
「熱っ！」
　彼は注いだばかりのお茶を呑もうとして熱にやられた。案外ドジなのかもしれない・・・今まで真剣だった空気がいとも簡単に崩されて私は拍子抜けした。
「ほら、笑い顔は可愛いよ」
　私は彼のその行為に自然と笑みを浮かべていた。
「・・・とに・・・てますか？」
「ん？」
「ほんとうに可愛いって思いますか？」
　私は声を少し大きくし、顔を赤くしながら再度訊ねた。
「可愛くない女の子なんていないさ」
　私は顔を上げて彼の顔を見る。その顔は始めと同じいい笑顔だった

◇

結局私はこの子を貰って帰った。帰った頃にはもう空は暗くなっていた。今思い直すとあの店主に上手く言いくるめられた気がしないでもない。あの熱がったのも演技臭いし・・・でもなんだか気持ちは晴れ晴れとしている。

「雛人形って言ってたな、あの人」

　私は机の上に人形を座らせる。相変わらず綺麗な容姿だ。昨日は少し不気味だと思っていたけれど、今は一切そういった気持ちを感じない。

「今日からここが貴女の家だよ」

　私は雛人形を机の端っこに座らせてあげた。昨日みたいに狭くて暗い引き出しの中に押し込めたりはしない。こういう物を持って飾りたいと思うのも私。自分の気持ちに嘘はつかない。だから貴女もここに居てほしいの。

「自分に、もっと自信を持たないと・・・！」

　今日あの不思議な店の不思議な店主に言われたように、私は私。蟲の妖怪で蟲を統べるリグル・ナイトバグだ。言わば蟲の女王、今まで自分に自信を持てなかったが、よくよく考えてみるとこの立場は誇りを持っていいのだ。自信を持ってやらなかったから上手くいかなかったのかもしれない、始めから諦めていたのかもしれない。私は今日色々なことに気付かされた。

「明日も、自分らしく良い一日だといいな」

　私は自分に自信を持って、前向きに生きるようになりたい。そう思いながら眠りについた。

-どうか幸せな日々を-

（A・終）

(B)

「こんな森の中に家が・・・」
　私はその家に近づいて窓から中をのぞいてみる。そこには至る所に人形が置いてあった。上を覗くと人形が吊るされており、壁を見ると人形が鎮座している。正直不気味だ。
「ここならわかる・・・かも」
　私は不気味で怖いと思う気持ちを抑え、玄関のドアを叩いた。
コンコン・・・
「・・・・」
　返事が無い。留守だろうか？いや、それより本当にここに人（？）が住んでいるのだろうか・・・そう思いながら扉をよく見ると上の方に可愛らしい人形の装飾がされたドアノッカーがあるのを見つけた。
「これだったら聞こえるかな？」
トントン・・・
　さっきとは違い、大きい音が響く。それと同時に家の中から足音が聞こえてきた。
「誰かしら？　魔理沙にしては丁寧すぎるわね・・・」
　そんな声がしながら扉は開いた。
「どなたかしら？　って、この前見つけた蛍じゃない」
　扉から出てきた金髪の女性は私を見て呟いた。
「あ、貴女はこの前白黒と一緒に私を攻撃した女！」
　私は咄嗟に逃げ出そうとしていた。
「まぁ待ちなさい、何か用事があってきたんでしょ？」
しかし、私はこの人の人形に周りに囲まれてしまった。
「ひぇぇ」
「取って喰ったりしないから、あがってきなさいな」
　信用できない・・・そう思いつつも私はこの人形師の家にお邪魔することになった。

◆

・・・クライ・・・サミシイ・・・

◆

　中に入っても周りは人形の山・・・
「さて、用事は何かしら？」
　私は椅子に座って人形師、アリスさんと対面している。いつまでも怯えてたらダメだよね。そう思い私は人形をポケットから取り出した。
「あの、これなんですけど・・・」
　私は机の上に人形を座らせた。アリスさんは興味深そうに眺めている。
「昨日川に居たらこの人形が川上から流れてきて拾ったんです。それで今日川を上って行ったらこの家があって、もしかしたら何か知ってるかもって思ったんですけど・・」
　私は今日訪れた理由を淡々と話す。その間もアリスさんはまじまじと人形を見つめていた。
「触ってみてもいいかしら？」
　いきなり話かけられ少し驚いたが私はその質問に承諾した。
「・・・いい作りにいい素材ね。関節もしっかり動く、これは名高い師が作ったに違いないわ・・・そうだとしても、誰が作ったのかしら・・・」
　アリスさんはじっくり眺めている。この様子だとこの人形はこの人のじゃないようだ。
「あの、アリスさんが作った物ではないんですね？」
　私はおずおずと訊ねた。この人人形見てる時眼が怖い・・・
「ええ、私ではないわ。それにしてもよく出来てるわね・・・ちょっと羨ましいわ」
　そう言って人形を机に戻すアリスさん。私には周りに居る人形達もよく出来てると思うけど・・・やっぱりプロが見たのでは違うのかな・・・
「ごめんなさいね。私ではかなり手の込んだ作りであることしかわからないわ。」
「そうですか・・・わざわざありがとうございました。」
　本当に悪そうにあやまるアリスさん。何だ結構いい人じゃないか。あの日はきっと白黒が居たからいけなかったんだよ。きっとそうだ。
「いえいえ、私もいい人形を見せてもらって

良かったわ。」
いい笑顔で答えてくれる。
「その人形拾ったって言ったわよね？私に譲ってほしいけど、誰のかわからない人形を持ってるのも気味が悪い気がするから、貴女が持ってなさいな」
自分が持つのは嫌でも私が持つのはいいのか、この人は・・・
「また機会があったら遊びに来てもいいわよ。その時は皆で歓迎するわ」
そう言うと共にアリスさんを腕を動かし初めた。何が起こるのかと思えばいきなり周りに居る人形達が動き出した。
「わ、わっわぁぁぁ！」
私はあまりの出来事に驚いて椅子ごとひっくり返ってしまった。というか怖い
「あはは、ごめんなさい。びっくりしたかしら」
アリスさんは笑いながら私の元へと歩み寄る。
「人形を魔力の込めた糸で操っただけよ。」
そういわれてよくよく人形を見てみると確かに細い糸がある。
「び、びっくりするじゃないですか！」
私はゆっくり机に手をつきながら立ち上がった。
「あはは、ごめんごめん。今度来た時は皆でまた歓迎してあげるから」
そういいながら人形を私の近くにまで操作する。やっぱりこの人怖いかも・・・

◆

結局わからずじまいで家に帰ってしまった。その頃には辺りは真っ暗になっていた。
「あーあ、なーんにもわかんなかった。したのは怖い思いだけかぁ」
未だにアリス邸での出来事が頭に焼きついている。
「まぁ、別にどうでもいいかぁ」
すっかり人形に興味を無くしていた私は人形を机の引き出しの奥の方へと片付けた。そしてそのまま眠りに陥った。

◆

ワタシ・・・ダレカ・・・キヅイテ・・・
ナガシテ・・・ハラッテ・・・

◆

それから一ヶ月がたった。四月の暖かい日差しが森に射し込む。リグルは惰眠を貪っていた。いつもなら友達が遊びに誘いにきて寝ているリグルを叩き起こしてしまうのだが今日は違った。皆は神社で行われる宴会の準備で各自が忙しかったのだ。
リグルが眠っている横で黒い霧のようなものが机の引き出しから溢れていた。リグルはそれにすらも気付かず眠っている。その霧の発生源である引き出しはゆっくりと開いている。勿論誰かが彼女の部屋に不法侵入した訳ではない。一人で勝手に動いているのだ。引き出しから何かが浮いて出てくる。
緑色の髪、赤黒いドレスをした人形・・・リグルがちょうど一ヶ月前に川で拾ってきたモノだ。
ソレは周りを見渡す。その眼は赤く鋭く光っている。
ソレは見つける。ベッドで何もしらず眠っているリグルを
ソレは発する。黒き霧を
ソレは呼ぶ、部屋の主の名を、「リグル・・・」と
彼女は起きた。眼をこすりソレを見つける。
彼女は凍りつく。理由はわからないが本能が危険だと感じ取る。
彼女は脅える。己を遥かに越える脅威を目の前にして
彼女は逃げる。この空間と外界を隔てる一枚の板の元へ
ソレは近づく。ゆっくりと飛んで距離を縮める。
ソレは囁く。「リ・・グル・・・イッショニ・・」
彼女は恐怖する。真っ黒な霧に包まれ動くことのない板を目の前に
ソレは追い詰める。脅えきった少女を笑うかのように口の端を吊り上げ「・・ショ・ナル」
彼女は抵抗する。目の前に迫る恐怖に

ソレは笑う。目の前の少女の無駄な抵抗に
「ツカマ・・タ」
「ズット・・イッショ・・ダネ」
　そして、その空間は　静寂に包まれた。

◆

「おーいリグルー？」
　陽が紅く染まる頃、二人妖精が森の一軒屋を訪れていた。
「いないのかー？　おーい？」
　ドンドンと遠慮無しに扉を叩く
「チルノちゃん、思いっきり叩きすぎ・・・寝てるのかもしれないし」
　横に居た大妖精がチルノに言う。
「あたいを無視して寝るとはいーどきょーね！　それー！」
　そう言うと共にチルノは扉を蹴破った。
「・・・後で怒られる」
「真っ暗だ。リグルーこらー！」
　チルノと大妖精はは暗い室内に入り込み、チルノが話かけるが返事は無い。
「待ちきれず先に行ってるのかもしれないよ？」
「ちぇーなんだよー！あたいを置いてくのかよー！」
　チルノは文句を言いながら後ろを振り向く
「？　何してんの？　さっさといこーよ」
　目の前で大妖精が玄関の扉を開けようとしていて戸惑っているのを見てチルノは文句を言う。
「・・・扉？」
　チルノは眼をこすって良く見る。確かに扉が有る。チルノが蹴破って壊れたはずの扉が、しっかりと元通りになって固く閉ざされている。
「ど、どーなってんの？」
「あ、開かないの」
　焦る大妖精と状況を読み込めないチルノ。その後ろでゆっくりと立ち上がる人影。
「チル・・ノ、ダイヨーセ・・・」
　いきなり自分達の名前を呼ばれて振り向く二人。その顔には恐怖がにじみ出ていた。
「イッショ・・・ミンナ・・トモニ・・」
　そこに居るソレの手が二人の首を掴む。そして、その手から黒い霧を出し、二人の口の中に入れていく。そのうち二人の恐怖の顔は無表情へと変わっていった。
　ただ、その眼は焦点はあっておらず、何も映していなかった。
「リグル・・・ワタシトイッショ・・・カワイイ・・イッタ・・リグル・・・」
　空間は　静寂に包まれた

◆

雛人形、人の厄を請け負うヒトガタの役割もする。厄と言うのも様々ある。災いである厄難、災いのある日の厄日、他人の苦しみを払う厄介。それらの総称が厄である。ヒトガタとして人の厄を請け負った雛人形を川に流し、その厄も流してもらうというのが流し雛である。
　では、その厄払いを途中で止められたら、行き場の無い厄はどうなるのだろうか。そのまま霧消するのだろうか？　すぐ近くの媒体に移るのかもしれない。

◆

リグル・・・ワタシヲスクッテクレタ・・カワイイイッテクレタリグル・・・ズットイッショ・・トモダチモワタシトイッショ・・・ミンナミンナイッショ・・・
ソウ・・・ミンナ・・イッショ・・・
アナタモ・・・

-何時か人の手で救いがあらんことを-

（B・終）

〈作者コメント〉
　どうも皆様始めまして、悠奈です。今回初投稿となります。なれないＳＳを書いたので文法とか変でも生暖かい眼で見逃して・・・（えー　創刊開始から読んでた月刊ナイトバグ、ある日勇気を持って投稿しようとした結果がコレです。暴走思考回路のせいで分岐という変な設定を入れてしまった作品・・・製作って大変ダナァ。読んで頂いた方、編集される小崎さん、ありがとうございました

『 ぐるぐるぐるり 』 貴キ

家にも雛人形がありますが長い事押入れに仕舞ってあるので虫が付いてないか心配です。
■例大祭ひ-34b「大和芋」です。宜しくお願いします～

『 無題 』 IDEA(GAGrim)

『 おだいりぐる。 』 緑

たぶんリグルはおバカなので主役を間違えて教えられてると思います。

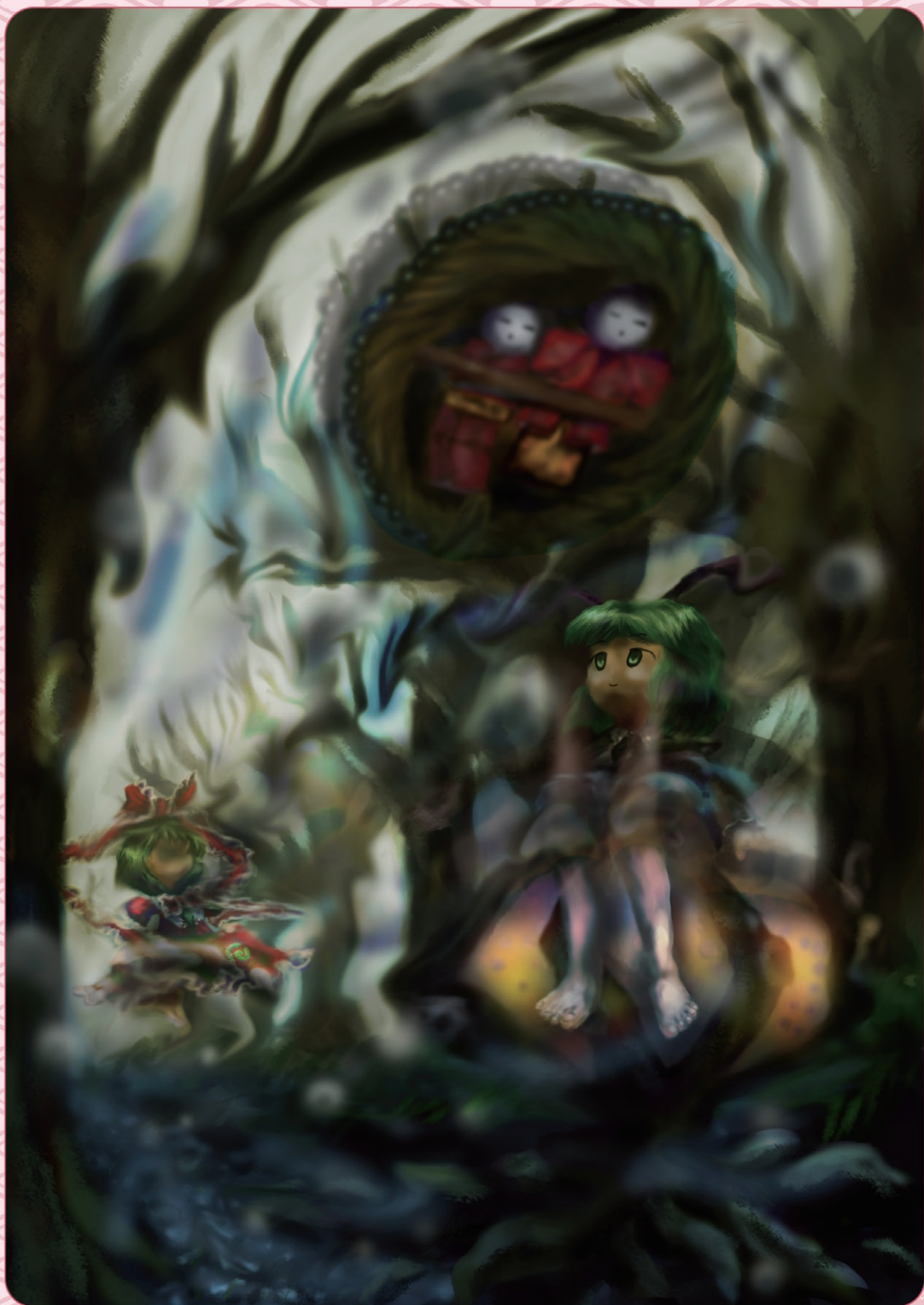
『 緑一杯の幻想郷へようこそ 』　Wrigglove

今回【雛特集】と言う事で、テーマに沿って雛ちゃんとリグル君を並ばせてみました。雛ちゃんを描くのは初めてでしたので苦労しましたが、その分愛着も沸きました。雛ちゃんらしくクルッと回った躍動感が伝わっていれば良いのですが・・・　作品名については髪の色を意識して付けてみました。

『 無題 』 ADDA

何か一人が抜けたようですが。少女たちは今年も元気に。

『 雛リグル 』　くらげん

一緒に勘違いしてくれる方を募集しています。ん、いま募集しても意味ないのか？
きっと他にも同じネタの方がいるはず！居てください！あ、例大祭もよろしくお願いします。

『 流し雛 』　蛍光流動

流した厄の行く末は。

『 りぐひな 』 キッカ

お喋り中の雛とリグル。そのまんまですね。

八意 永琳
あらゆる薬を作る程度の能力を
持つ天才である

だらしない姫様より
よっぽど永遠亭の
中心的存在だ

兎たちにも慕われる彼女だが
あまり知られたくない秘密を持っていた

りぐるきゅん

描いた人 東

永淋の部屋
の、本棚
ウフフフフ…
見せられないよ(ガチで)
紫に貸してもらった
クイズマ◯ックアカデミーの
ユウきゅんの十八禁同人誌…
ユウきゅんのTAMAωTAMAとか
マジでありがてぇなぁ～♂
わぁい
彼女はショタコンだった
私もだよ☆

ガ
←お○んちんランド
永遠亭→

気配はこのへんから…あ、あの子かしら？
!?
にこにこ

…あ…あ…

アッラアアアアー!?

いけない危ない危ない…
私の女の子きゅんきゅんしちゃう…

お姉ちゃん一緒に遊ぼうよ!

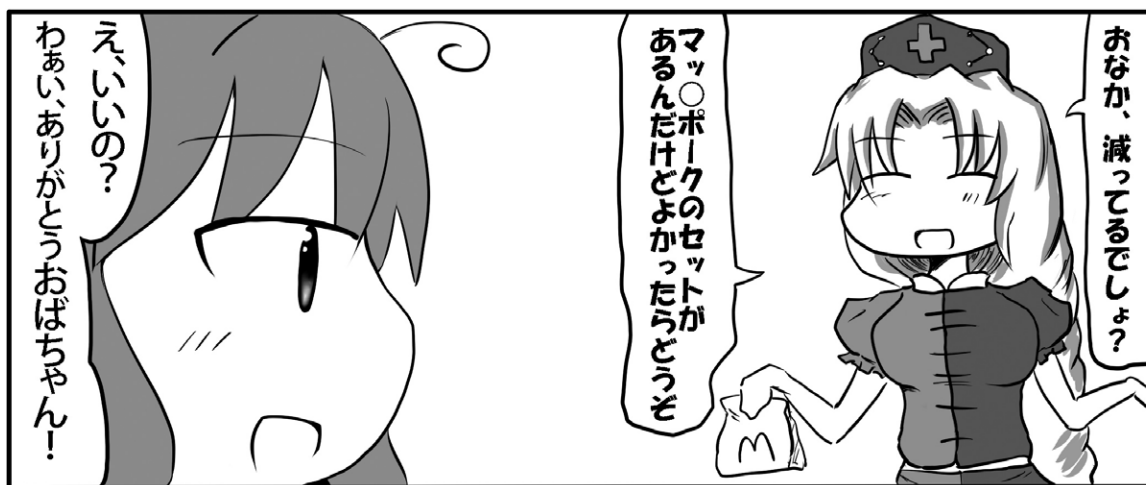
ブッ

きゅん♡

※永淋の妄想です

そして天才は
行動を開始する
そこの君
ちょっといい？
や、おはよう☆
びくっ
え、何ですか？
おなか、減ってるでしょ？
マッ○ポークのセットが
あるんだけどよかったらどうぞ
え、いいの？
わぁい、ありがとうおばちゃん！
おおば!?
いただきまーす
もぐ
もぐ
バタっ
計画通り…
薬の力は偉大なり
さて、あとは森にでも
連れ込んで、フッフッフッ…
まさかの十八禁に突入と
思われた、だが…

ついてなかった・・・

がっくし

そーなのかー
で、何が？

ちんちん♪

目が覚めると
彼女は**全裸**だった

そしてリグル現象につづく（嘘

おわり

リリーホワイトの書斎

著者：くろと

蒼ずんだ雲から綿の様な粉雪が、深々という無音を奏でながら降っている。

私は手提げ袋を携えて鍵の掛かっていない玄関の戸を潜った。

回廊を突き進んで扉の前で停止する。私は扉をノックした。扉の向こうから、どうぞ。と心地良いソプラノトーンがはっきりと響いた。私は扉を内側に開けて入る。

室には薪がくべられた暖炉、その傍に三人が座れるぐらいの長椅子が二脚、季節に関する図書が収まった本棚、それに浅葱色のカーテンで景色を隠した窓があり、書机が一つあった。そこに座っていたのは時期的には珍しい妖精で、またの名を春告精リリーホワイトだった。彼女は左手に持った鉛筆で机上に置かれた用紙に文字や数値を細かく書き込んでいた。

私は彼女に会釈し、手提げ袋から紙の束を取り出した。

「はいこれ」

リリーホワイトがそれを受け取り、ありがとう。と会釈を返した。

手渡したのはここ一〇年の花粉に関する資料で、里に出向いて稗田阿求に書き出してもらったものである。リリーホワイトは筆を止めて、紙の束に目を通し始めた。

手持ち無沙汰になった私は暖炉の前に居座り、赤くなった両手を暖めてから帰路に着こうとした。

と、玄関から金具を打ち付ける、断続的な金属音が響いてきた。

「誰か」来たよ。と呟くが、リリーホワイトは書机を離れる気がないらしく、紙の束を右手側に置いて続きに取り掛かっていた。それはつまり、私に出ろ。と無言で訴えている。

止む無く、私は客人を出迎える為に玄関に向かった。

玄関に到着して戸を開くと、そこから一気に白い旋風が止めどなく侵入してきた。いつの間にか外は猛吹雪となっている。

「ばんは、リリー……ほわいと?」

戸から雪と共に入ってきたのは、それと同じく白い頭髪をし、こんな季節にも関わらず脇の部分がない袖を身に着けた、白狼天狗の狗走椛である。

「あり？　リグルがどうして目の前に……浮気?」

「ちがうちがう」

私は苦笑いと身振りで否定した。

椛は衣服や頭髪に積もった雪を払い落とし、リリーホワイトの居る書斎に向かって歩き始め、私がここに居る事の説明を要求してきた。私は要点だけを簡単に説明する。

「一昨日、春を告げるのを早めてくれるよう頼んだら、居合わせたレティに叱られて。それで反省も含めて、リリーホワイトの手伝いをするはめに」

「自業自得ッスね」

呆れ顔の椛にすっぱりと言い切られ、私たちは書斎に着いた。

椛はノックもせずに室に入ると暖炉に直行した。
「はー、あったかい」
　濡れた頭髪と両手を乾かすように椛は丸くなって暖を取り、無視されたリリーホワイトも机上で書き続けるばかりだった。
　その光景に私が何かを言おうとしたら、先に椛が喋りだす。
「ところで二人とも知ってるスか？　三〇年前に起きた怪事件の事」
　椛は私やリリーホワイトの返事も待たずに話し続ける。
「里郊外にある好事家の屋敷で起きた事件で色々あって未解決なんよ」
　私が口を挟んだ。
「色々……って？」
「ほら、三〇年前に霧の湖が涸れる異変が起きたッスよね？　あれが事件発覚の四日後に起きて、解決するのに一ヶ月も掛かったもんだから、異変が終わった頃にはみんなの興味が薄れてて」
「あー、なるほど」
「で、さっき事件に関する当時の新聞記事を発見しちゃって、休憩がてら退屈しのぎに来たわけで」
　椛は言い終わるなり袖から三枚の紙切れを取り出した。それは古紙のように黄ばんでおり彼女の言葉を信じるならば三〇年前の新聞の切れ端という事になる。
　私は椛から三枚の記事を受け取り、長椅子に腰掛けて黙読した。

『棄てられた左腕』
　一日朝、人里郊外にある屋敷の一室で肘までしかない左腕を、通りがかった夜雀が窓越しに発見した。第一発見者から報を受けた里に住まう人妖交えた五、六人は鍵が壊された玄関から屋敷に押し入った。犯行現場である室に辿り着くと凄惨たる光景が出迎えた。室内には銅銭三五枚、銀貨一三枚、緑柱玉の指輪一個が各所に散らばっており、床に敷かれた絨毯には一人分の血液をぶちまけたかのように血塗れで、その絨毯に根元から千切れた左腕が落ちていた。壁には著名な作者が遺した書画も掛けられていたが破られていた。天井の電球は光り続けていた。また室内に進入する方法は窓と扉以外になく、窓には鍵が掛かっていた。残っていた血液量から考えて被害者は室内で解体されたと思われる。屋敷や近辺をくまなく捜索したが左腕以外は見つかっていない。

『凶行、二時間三〇分以内か？』
　左腕は二時間三〇分以内に本体より切り離された事が判明した。これは屋敷に新聞を配達している天狗と左腕を発見した夜雀の証言を元にし、屋敷の特異性と現場検証から断定された。というのも屋敷には被害者によって様々な魔法が仕掛けられており、電球からは灯りの魔法とも呼ぶべきものが発見された。これは被害者にしか点灯、消灯が出来ないものであり、我々が室内を調べた時も電球の灯りが消える事は無かった。しかし、天狗が薄暗い早朝の暗い時間帯に新聞を届けた時には窓から灯りが消えており、玄関には鍵が掛かっていた。それから三時間、夜雀が通った時には灯りがついており、玄関の鍵は壊されていた。二人は偽証不可能な嘘発見器にも掛けられ、それが確信たる証言だと証明されている。そのため事件は天狗が新聞を配達してから夜雀が発見するまでの三時間以内に、犯人は鍵を壊して侵入し、被害者を解体し、左腕を室内に捨て置いて逃亡したと思われる。そして一人分の解体には急いでも三〇分ほど必要だという事も検証された。数々の証拠から容疑者は屋敷から二時間三〇分以内にいける場所に当時居た、夜雀を含めた八人に絞られた。しかし、嫌疑された八人には全員、アリバイが認められた。

『被害者に独占取材』
　三日夕、件の左腕事件現場にて被害者が幽霊として発見された。当局の取材に対し被害者は、「こうならないようにしてたつもりだけど、不注意であっさり死んじゃって。迷惑掛けてすみません」と申し訳無さそうな笑顔で述べてくれた。犯人や犯行状況について記者が質問すると、「情けないやら恥ずかしいやら……このまま謎にしておいてください」と言い残し、彼岸へと向かってしまった。当

局はこれからも事件の取材を続け、真相究明に徹する所存である。

　私が最後の一文を読み終えると、いつの間にか向かいの長椅子に座った椛が苦笑しながら、その続きを喋ってきた。
「実際は湖の異変に食いついて終了したッス」
「ふーん。でも結局、誰が犯人だったんだろう？」
　私は思考をめぐらした。しかし、思いつくのはありきたりで、こうあればいいなという当て推量でしかなかった。それ以前に記事三枚ではヒントが足りなさ過ぎる。
　一〇分ぐらい経ってから背後から伸ばされた細い手がするりと三枚の紙切れを奪い取った。振り返ると、その手の持ち主リリーホワイトが記事を一見している。
「リリーはどうみるッスか？」
　椛が問いかけた。
「思い当たる容疑者が多すぎて分かりません。……それにしてもいい加減な記事です」
「いい加減？　というより思い当たる容疑者って……八人の事はほとんど書いてないよ？」
　私がそれを疑問とするとリリーホワイトは記事を返して長椅子に腰掛けた。私は記事を再読するも八人に関する内容はまるで書かれていない。
　リリーホワイトは肘掛けに肘を突いた。
「八人は犯人じゃないですよ。これは嘘発見器とやらによって確定しています」
「あ、そっか……？」
「いい加減というのは、その旨が全く書かれてないからです。ただでさえ煩雑で読みにくいのに」
　リリーホワイトは、ふわぁ。と大きな欠伸を一つ。どうやらデスクワークで眠気がたまったらしい。
「八人の中に犯人が居ないなら、二時間三〇分という前提は崩れます」
「やっぱり三時間以上は難いッスね」
「え、え？　どういうこと？」
　私は二人の会話に乗り遅れた。リリーホワイトが眠気眼で私を一瞥し、その理由を説明してくる。
「単純に天狗が新聞を配達して夜雀が発見するまでの猶予が三時間だからです。二時間三〇分というのは三時間から解体時間三〇分を引いただけです、だからそれを省いて三時間です」
　眠気に押され始めたか、リリーホワイトの声音は次第に小さく、囁くような音量に落ちていった。
「それは分かったけど。なら容疑者が多すぎるってのはどうして？」
　私が疑問を言うと椛が噴き出す様に笑った。それから椛がリリーホワイトに代わって答えた。
「時間を止める能力や一瞬でどこでも移動できる能力が幻想郷には溢れてるからッスよ」
「あ！」
　言われてみればそのとおりだった。幻想郷では距離も時間も思いのままである。
「なら、この事件ってその手の能力者が犯人なの？」
「それは分かりません……。ただ、灯りが消えていた事や鍵が壊れていた事を考えると、やっぱり違うと思いますよ」
　またも分からない。灯りが消えている事や鍵が壊れている事が先述した能力とどう関係するというのか。
　私の感情を悟ったリリーホワイトが説明を付け加える。
「時間を操れるなら灯りを誤魔化す必要が、移動が自由自在なら鍵を壊す必要がそれぞれになくなります」
「ちょ、チョット待って！」
　またも会話に乗り遅れるところだった。というよりこのままでは乗り遅れるしかない。目前の二人はどうして会話を止めたのか、不思議がっていた。やはり会話に乗り遅れた。
　私は急くように疑問点を突いた。
「鍵はともかく、灯りを誤魔化す必要ってどういうこと？　被害者にしか消せないんでしょう？」
　電球の点灯、消灯は被害者にしか出来ない。それは確かに、記事にも書かれた事実のはずだ。では誤魔化すとは一体全体どういう

ことだろう。
「はい。だから誤魔化したんですよ。もしも時間や距離という能力が関係していないなら、被害者は天狗が新聞を配達する前には、解体なり切断されていたとなります。そんな状態で部屋の灯りをつけるとは不可解で、つまり犯人が灯りを消す偽装をしないと成立しません。……灯りを誤魔化すだけなら電球をカバーで覆えば済むと思います」
　長椅子で眠り落ちそうなリリーホワイトからあっさりと言い渡された。私は、ぽかんと口を開けて呆気にとられた。それから椛に小声で聞いてみる。
「リリーってこんなに冷静で頭が良かった？」
「頭の良し悪しはとりあえず、春以外のリリーは割かしこんな感じッスよ。知らなかった？」
　知らなかった。私が感心していると、リリーホワイトが指で瞼を擦りながら話を再開する。
「灯りを誤魔化して鍵を壊した理由は……、やっぱり時間を誤魔化す為だと思います。それなら納得できます」
「鍵を壊した理由は屋敷に入るためじゃないの？」
「それだと天狗が来た時に鍵が壊れてないとおかしいですよ。矛盾してしまいます」
「ま、待って頭がこんがらがってきた」
　私のあたふたした態度に椛が押し殺したように含み笑いを零した。そしてリリーホワイトは私が何度も会話を止めたせいか、白眼で睨んでいる。
　私は場の空気を誤魔化す為に続きを促す事にした。
「結局、リリーは事件の真相をどう考えてるの？」
　私の問いにリリーホワイトは逡巡した。
「……気になったのは部屋の状態です」
「部屋の状態？」
「銅銭に銀貨、指輪まで散らばって、さらには書画まで破られています」
「それは……強盗だからじゃ？」
「違いますよ。物取りなら銀貨や指輪は盗っていきます。書画を破る理由もありません」
　リリーホワイトは睡魔で蕩けそうな眼でしっかりと告げてきた。私はそれに圧倒され、別の理由を模索した。すぐに思い浮かんだのは被害者だ。
「なら被害者が抵抗して暴れたんだ。襲われたんだもの」
　誰だって殺されそうになったら抵抗するはずだ。しかし、リリーホワイトは私の意見を容易く否定した。
「取材で、不注意であっさり死んじゃって、と述べているじゃないですか、抵抗しておいてそれは無いと思います。……そうです、情けなくて恥ずかしい、犯人は玄関ではなくて窓から入った、それは窓を閉め忘れたからで……」
　ウトウトとしたリリーが独り言を呟きだした。私は分からず、椛に助けを求めた。だが、視線の先で椛は長椅子に背もたれ、一足先に夢世界に飛び込んでいた。リリーホワイトもいい加減に眠りたいのか、二度目の大きな欠伸を掻き、結論をゆっくりと出した。
「たぶん犯人が散らかしたんです。……ほら、さっき灯りはカバーを誤魔化せるといいましたけど、それ以外にも誤魔化せる方法が……でも、そうすると、自分の姿も見えなくなって、机や壁にぶつかるから、手探りで……」
　と、そこまで言ってからリリーホワイトは椛を追うように深く眠っていった。
　取り残された私は考える事を中断し、隣室から毛布を拝借する、書斎に戻り、肩を並べて眠る椛とリリーホワイトに毛布をかけた。
　私は二人の愛嬌たっぷりな寝顔を見比べてから退室した。

（終）

〈作者コメント〉
『リグル熱愛！　相手は春告精？』
　三日夕、狗走記者がリリーホワイト宅を訪れたところ、偶然にもリグル・ナイトバグと遭遇した。本人は必死に否定していたが、二人が密接な関係であることは明白であった。

地位向上を目指して －灰と猫－

著者：如月翔

つい先程完成した新聞を持って空を飛ぶ。取材を終わらせてから、ずっと室内で作業していたから気分が良い。
ついつい飛ぶ速度を上げてしまう、このまま飛び続けていたい。
しかし、そうすると新聞が配れないことに気付く。
「後渡していないのは・・・森の皆さんですか」
さっさと行って渡してしまおう。

「こんにちはー、毎度お馴染み清く正しい射命丸です」
「いらっしゃい、今日は何のようだい?」
「今日は新聞を届けに参りました」
「そうか、君もよくやるね相当な物好きだ」
「いえいえ、店主さん程では」
「僕は物好きではないよ」
そんな店主の反論を全て聞き流しつつ、変化があるか確かめるため店内を見渡す。
空を飛ぶのは好きだが、私は新聞記者でもあるのだ。
記者たる者、少しの変化も見逃さずに日々を過ごさなければいけない。
それが何気ない日常からも号外を生みだすコツだ。・・・大抵失敗するのはご愛嬌だが。
さて、古く物で溢れているが無駄に立地条件の良いこの小屋にはっと何か違和感がある。
以前合った物が無くなっているような気がする、道具屋なのだから、売れれば無くなるのは当たり前だが。
売るなんて店主にしては珍しい、それに今の季節には似合わない物が無くなっている気がする。
「あの、あそこに有ったダンボールはどうされました?」
「そのダンボールなら売れたよ、まさか欲しかったのかい?」
「いりませんって」
「そうかい? まあ今更欲しがられても困るけどね」
そう言って新聞に目を落とす店主。
まだ話は終わっていないというのに、と文句を言いたくなったが何時ものように本を読むのではなく。
私の新聞を読んでいる、これでは文句を言えない・・・ずるい。
「あの、まだ話は終わっていませんけど」
「ん、まだ何かあるのかい?」
「ありますよ、ところであのダンボールって確か殺虫剤でしたよね?」
「そうだよ、それがどうかしたかい?」
「こんな季節に売れるなんて可笑しいと思いませんか?」
「確かに今は冬だが、欲しいと思った道具を提供するのが僕の役目だよ。それに欲しいというお客に売らなかったらお互いに損だろう?」

「それは判りますけどやっぱり可笑しくないですか？　気になりませんか？」
「悪いけど全く興味がないよ」
「そうですか・・・ところで誰が買っていかれました？」
「誰でもいいじゃないか、僕の得にもならないし」
「教えてくれるなら宣伝しますよ？」
「・・・君の新聞で宣伝して、お客が増えるとは思えないのだけど？」
　確かに私の新聞を真面目に読む人はあまり多くはない、痛い所を突かれる。
　でも弾幕ごっこでお相手した方々には全員配っているから、それなりに宣伝出来る・・・と思う。
　お金を置いていくお客が来るかどうかは別として。
「じゃあ今度美味しいお酒でも持ってきますから」
「まあそれで手を打とうか、買って行ったのはメイドとリグル・ナイトバグだ」
「へ？　それって蟲のですか？」
「それ以外に同じ名前の子はいるのかい？」
「・・・いえ、私は知りませんね」
　主人があれなメイドはともかく、蟲が殺虫剤を買うなんて予想外だ。
　これは話の内容によれば記事に出来るかもしれない。
　直ぐにでも探し出して話を聞いてみよう、そうと決まればこんな所には居られない。

「じゃあ私は失礼しますね」
「そうかい、またのお越しを・・・忘れ物がないようにね」
「ちゃんと約束は守りますって」

　飛び回っている間に太陽も真上を通り過ぎて強い日差しを降り注いでいる、冬の終わりも近いだろう。
　暫く探してみたけど何処に居るか判らないし、小腹も空いたので情報収集と食事を求めて人里に行こうか。
　リグルの居場所を知っていそうな人を探そう、いるのかは知らないけど。

「うう・・・」
「変な声出してどうかしたリグル？」
「寒い」
「あはは、寒いのが苦手なのにその恰好じゃ寒いよね」
「そうだよね、マフラー使う？」
「ありがと橙、ところで次は何を買いに行くの？」
「味噌と醤油だから酒屋だね、・・・何処だっけ？」
「こっちじゃなかった？」
「いやいや橙、こっちだって」
「あれ、そうだった？」
　私達はミスティアの手伝いをするために人里に来ていた。
　屋台に新しい味付けの食べ物を、追加しようとしているらしい。
　ミスティアは凄いな、焼き鳥撲滅のために出来る事をどんどん増やしていっている。
　私も仲間の為に負けていられない。

「さてと、買い物も終わったし早速帰って色々試してみようか」
「そうだね、太陽はまだ高いけど・・・」
「風もあるし帰ろうか」
「試すって何をやるつもりで？」
「焼き八目鰻の新開発よ」
「ご一緒しても宜しいですか？」
「別に構わないわよ、そのかわり新聞頂戴」
「読む気ない人に私の新聞は渡せませんよ」
「なら読んでから使うから頂戴」
「（・・・ミスティアって結構酷い事さらりと言うよね？）」
「（興味がない物には言うね）」
「それでも嫌です、って違います貴方を探してたんです」
「え、私に何か用なの？」
　不意に話を私に移すから少し驚いた。

何だろう、新聞のネタになるようなことをした覚えはない。
別の理由だろうか？思い浮かばないけど。
「殺虫剤を購入されたようですが、まさか以前言った事を実行するつもりですか？」
「そんなことする訳ないじゃない、どれだけ犠牲が出るか」
「エサが減るのは困りますね、それに多少強くなったところで巫女や魔法使いには敵いませんし」
「だからしないって言っているでしょうが」
「ならどうして殺虫剤を？」
「それは・・・」
殺虫剤を集めていた理由を説明する、これで何回目だろうか？
私にとっては大切だけど、記事にした所で対して面白くないと思う。

「記事にしにくい内容ですねえ」
「そんな事言われても困るよ」
「仕方ありませんね、紅魔館の方に行きますかこれ以上お連れのお二人を待たせるのも何ですし」
「そう、じゃあね」
「話は終わったの？」
「そろそろ帰って新しい味付けを考えようよ」
「では、また今度屋台にお邪魔しますね」
「新聞持ってきてくれるの？」
「新聞は持ってきませんが、その変わり宣伝しますから、それでは」
「結局あの天狗は何がしたかったかな？」
「さぁ？」
「じゃあそろそろ帰ろうか、夜になったらルーミアも来るだろうし」
「そうだね」

屋台に戻って買ってきた調味料をドジョウや鰻に使って試してみる。
ルーミアも加わって焼き終わった物を食べ比べてみるけど、どれも美味しい。
・・・食べ比べと言っても何時も通り屋台で雑談をしながらだけど。
「・・・」
「どうかしたミスティア？」
「いや、そういえば地位向上をさせる方法を考えていたのにどうして殺虫剤を集める事になったのかなって」
「私はその時居なかったけど、確かに地位向上させないと退治されるのは変わらないよね・・・？」
「リグル、これからどうするの？」
「・・・えーっと」
「もしかして、何も考えてないとか？」
「う・・・」
どうしよう・・・何も考えていない。

橙の言うとおり地位向上させないと、殺虫剤をどれだけ集めても別の方法で退治されてしまう。
あの時は地位向上を目指して考えていた筈なのに、何時の間にか目的が殺虫剤集めにすり替わっていた。
「・・・とりあえず、今は冬で虫もそんなに居ないし。殺虫剤も集めたから春までに何とかしないとね」
「私も一緒に何かないか考えるからさ」
「皆で考えればきっと出来るよ」
「うん、ありがと」
その後、どうすればいいのか、どうするのかを話してみたけど。
結局朝になっても何も浮かばず、解散になってしまった。
虫の知らせサービスも悩んだけど、今回はそれ以上だ。
誰か頭の良い人にでも助けを求めた方が良いのかもしれない・・・。
頭の良い人が周りに居る橙に頼んでおけばよかったかな？

（続く）

〈作者コメント〉
やっとタイトルのスタート地点に立つ準備が整いました、準備に半年もかかりましたが・・・ところで前回の冒頭部分は美鈴と幽香をイメージして書きましたけど判らないですよね・・・申し訳ありませんでした。

小さな小さな蟲の詩

著者：夏樹　真

私は蟲の妖怪だ。
この世界で蟲達の王女だなんて呼ばれたりもする。
でもそんなに大した存在ではない。

私より実力が高い妖怪はたくさん存在する。
それこそ無数に存在する。
そんな中を私は生きている。

私はたまに考える。
こんなちっぽけな自分に意味などあるのかと。
こんな存在は必要なのかと。

私は弱い。
いくら背伸びをしたところで届かないものばかり。
すくえないものばかり。

私は心の何処かで嘆いている。
仕方ないと諦めつつもなんとかしたいという思い。
そんな板ばさみに苦しんでいた。

私はある人に言われた。
一人で苦しむことに意味はないと。
上じゃなくて周りを見なさいと。

私は気づいた。

いつしか上ばかりを見上げてしまっていたことに。
届かない世界を望んでいたことに。

私は思いだした。
周りには気にかけてくれる人がいたことに。
仲間達の存在に。

私はもう一度考える。
こんな存在でも必要とされている。
その為に何ができるのかを。

だから、私はここにいる。
気弱になる自分を奮い立たせて。
頼りに出来る仲間たちに囲まれて。

私は今日も、生きていく。

（終）

〈作者コメント〉
夏樹です。今回は詩というものに挑戦してみました。が、詩って予想以上に難しいのですね。うちが上手く伝えたかったことが伝わればいいんですが……そろそろ連載みたいなのもしてみたいと思いつつ、ありがとうございましたー！

ガチ宣伝じゃーん!!

例大祭出ます。
よろしくお願いします。
あ、スペースは「ひ35a」です。

話変わりますけど、何で
雛特集なのかと考えたところ、
3月→卒業シーズン→巣立ち→雛
という深い考えがあるのだな、
さすが小崎さん!!
と思ったのですが、雛祭りですよね。
そう言えば、そんな日あったなぁ…。
…気付いてましたよ?うん。
ははは、まさか知らなかった訳
ないじゃないですか。
あえて鳥のヒナを描くという、
ネタなんですよ、これは。
本当は宣伝するつもりは
なかったけど、ヒナの絵だけだと
素で勘違いして痛い人だなと
思われてしまうから慌てて描いた、
なんてことはないんだからね!!
ほ、ほんとに最初から知ってたんだから!!

あ、なんで制服なのかはサークル名に由来するので、内容には関係ないです。すみません。

無題
夜行 p2

“地上の恒星”ってなんだか劣化版みたいなキャッチフレーズですけど、地上で見る分には空の星より蛍の方が遥かに明るい訳で。そうやって屁理屈こねて肩肘張るリグルかわいいです。
リグル、リグラー、リグリエーターの方々に心を込めて。

ほたりぐる～雛編～
怒羅悪 p37

先月とは打って変わって１ページ、引き続き投稿のどらおです、この子達の知識は相変わらずのようです。３コマのアレは・・・まぁ某薔薇のキャラのつもりです・・・w

幽香とリグルがちゅーするだけの漫画
羅外 p4

今回の漫画は今までで一番意味不明ですね。
これは言い訳できない

無題
草加あおい p38～p39

今月のテーマは難しかったです…ヒナの方は可愛いかなと思ってやったんですが…カ○メロですよねこれだと…描いた後に気付きました（死

悪ノリ
preludenano p22

（前略）リグル愛委員会の協議の結果、preludenano様のところに厄が降り注ぐことになりました。おめでとうございます。

リグると！
ひどぅん p40

雛さんは長女ではなく次女キャラ
そして腐女子　異論は認める

明日ハレの日、雛の昨日
Step p23～p30

だ、だって小崎さんが雛を好きに解釈していいって言うんだもん……、ところでリグルの立ち絵についてる蛍は使い魔でいいんだよ……ね？

りぐるきゅん
東 p57～p62

今回も時間がなかったので同人誌用に描いた漫画をそのまま投稿させてもらいました。だからすでに読んだことあるって方もいると思います、あと月刊ナイトバグなのにリグルの出番少なくてサーセン！それにしてもリグルおとこのこ派の変態は何気にたくさんいる気がしますね

蟲の手帖
HOUSE p31～p34

石人形博物館より石人形ストラップと小さな七福神を購入しました。パッと見はただの小石の塊に七福神や仏を見出す人々の想像力って素敵。人間と蟲の関わりにも興味がある私にとって、興味深い代物です。いつか資料館に自分の足で出向いてみたい。そんなデブ好きの出不精

夕日と、君と。
長閑 p87

遅くなったけどリグルからのチョコレートを貰う感じで。
私も欲しい。

おしゃれをしよう
巳 p35～p36

1p目と2p目で日にちが大分開いた状態で描いていたら違う絵に見える不思議。さて、最後のは誰なんでしょう(笑)

表紙
小崎

「(原稿を)手伝ってやろうか。ただし真っ二つだぞ！！」

― 素晴らしきヒエェッツカラルド

※2月号掲載作品の訂正とお詫び
月刊NIGHTBUG2月号中にて、下記ＳＳの作品名・作者名が入れ替わって掲載されていました。
申し訳ございませんでした。訂正してお詫びいたします。
誤）作品名：ペスカトーレときたまご、作者名：越冬
正）作品名：越冬、作者名：ペスカトーレときたまご

…………長い、夢を見ていた気がした。

ぼんやりと、半分だけ開かれた眼の映す世界は、白っぽい灰色。

思考は、収斂を試みては、霧散を繰り返す。

私以外に、この世界には何も無い。

のっぺりとした、色の無い、薄暗い空間。

……ん、反応あり。出来たみたいよ。

はい。じゃあ、皆さん呼んできますね。

……かすかに、誰かの話声がする。

ここは、私の瞼以外は灰色一色の、孤独な世界ではないらしい。

自分以外の誰かの存在を感じて、私の思考はゆっくりとだが色を帯び始める。

「さぁ、どうぞ。」

扉が開く音が聞こえた気がした。数人の話声。

なんだろう。

なにか、酷く懐かしい気がする。

少しずつ、私の思考の世界にかかった熱っぽい霧が晴れていく様で……。

……そうだ、私は何かを探していた気がする。

求めて……探して……手に入れて……なくしてしまった……、大切な何かを……

「リグルッ！！」

！？

ぬるま湯の様なまどろみの世界から、急速に冷えた空気の中に思考が引っ張り出された。

「私たちがわかる？見える？？聞こえる？？？」

「……う～ん、」

ぼんやりとフォーカスがずれていた世界に、急激にピントが絞られていく。

白い天井、白い壁、薄黄色のカーテン、窓から漏れ入る白く柔らかな光。あたたかい布団、懐かしい声。

「リグル……わかったら返事して……リグルッ！」

「……ぁ、」

色だ。無彩色の視界が、急にあざやかに彩られた。

ああ……多分、帰るべき場所はここにある……。

目を覚ませ……私……私は……

「リグル！！！」

そうだ、私はリグル。目の前には

「……みすちー……みすちー！？」

「ぁ……、リグル……私がわかるの……？」

私の瞳に映るのは、赤髪の少女。懐かしい……私の大切な友達。

思い出していく。私がだれで、ここがどんな世界か。

美しく、優しく、刺激的な世界……。だけど……私のこの記憶が正しいなら……

「みすちー……みすちーだよね？君……生きてるの……？」

「ちょっとぉ……（グズッ　亡霊に鳥肉にされかけた事はあるけどぉ……勝手に殺さないでくれるかなぁ……（グズッ　ちょっと長い風邪だったけど、君よりはよっぽど元気してるよぉ……（グズッ」

笑顔で涙声で、喋り続ける彼女が何よりそれを雄弁に証明する。

だが……だとしたら……、私の記憶は……？

あの家主を失った住居とその玄関前のあの羽根と、爪痕と、血と……

「……それは……だから……あたいが悪かったって……。」

「！！」

これも、聴き覚えのある声。

「チルノ！？」

「ちょっとした……悪戯のつもりだったんだってぇ……。」

「あぁん？？あの暗闇で酔っぱらって、おまけにあんたのおかげで熱と寒気でフラッフラッ！そこで足元すくわれたら、誰だった

ああなるわっ！！」
「だって……みすちー鳥だしとべるじゃん……、あんな派手に転ぶなんて……」
「飛べるかっ！！！」
親友、みすちーと漫才を演じているのは、明るい水色の髪に青いリボン。この部屋のうすら寒い空気は、季節のせいだけでは無い様だ。
「チルノ……チルノなの？」
「おぅ、あたいはチルノ！　他の誰でも無い、最強の妖精様だよ！」
少し瞳を赤く腫らしながら、得意げに胸を張る彼女の姿を、これまで何度見てきたことだろう。
……もう、永遠に見られる事は無いと思っていた。
「チルノ……私は……君を……、」
「私たちは妖怪だよ？　リグル。時間がたてば、あれぐらいの怪我は何とかなるものだよ。」
……もうひとつの、覚えのある声。忘れようったって、忘れられるものか。
黒いベストに白いシャツ、赤いネクタイ。赤いリボンと、まぶしい金髪に痛々しいのは、巻かれた白い包帯。しかし、その白よりもまぶしい笑顔。
「ルーミア……君も……」
「2か月以上もまだ頭の包帯が取れないけど、もう大丈夫だよ。」
「すっごい痛かったよ！　あたいが最強じゃなかったら死んでたねっ！」
再び視界に割り込む水色。
色々な情報が一度に流れ込み過ぎて、何が何やらわけがわからなくなった。
「ちょっと混乱してるかなー。私が家に居なかったのは、あの宴会の後ね……このバカチルノが、先回りして私の扉の前の地面に氷を張りやがってねぇ……」
「みすちーへ、思いっきり転んだんだよ。冷水かぶって体調が悪かったから、そのまんま……」
私は、その光景を夢想する……。
友に別れを告げながら、ふらふらと自宅の戸へ向かうみすちー。
体の覚えた作業。体調の悪さから、意識は既に数分後の、布団の中に入った自分でいっぱいだ。
やれやれと安心してドアノブに手をかけようと、右手と右足を差し出し……
世界が宙返り、体を支えようと咄嗟に伸ばした手は木の扉を引っ掻き、しかし目的は叶わず……。
地面に思い切り頭を打ち付け、羽根が舞い、……あ……額から血が……
「その……ほんとに……あたいが悪かったって……だから、バカって言わないでよぅ……」
ばつが悪そうに、今度はしゅんとしおれた草葉の様に縮んでしまうチルノ。
ああ……こいつは本当にバカだ……。
「で、気を失った私をここに二人が担ぎ込んでくれたってわけ。ま、物陰から隠れて見てた一人はマッチポンプだけどねー。」
「それで、一日一緒に居たんだけど……リグルも冷水被ってたから……大丈夫かなって……」
……会話が、思い出される。魔理沙の家の前。金髪の少女は、私の体調をたずねたっけ。
「……そうだ、魔理沙は……」
「私もここに居るぜ、お寝坊さん。」
三人とは少し離れて立っていた、大きな黒い帽子は見間違えようはずもない。
「やっぱり、結構混乱しているようね。ここからは、私が説明しようかしら？」
魔理沙の隣で、何やら機械の置かれた机に向かって椅子に座っているのは、見覚えの無い銀髪の女性。
いや、覚えが無いわけではなかった。
束の間見た、白衣を羽織った妙な服装の彼女と、今その隣に控えている、薄藤色の長髪の流れる妖怪兎。
彼女らがいかなる場面で登場したかは思い出したつもりだったが、今の私は、不思議と恐怖も疑念も感じる事は無かった。
「最初その夜雀が連れてこられた時は、打撲傷と風邪と診断したわ。その次の日、同じくフラフラしながら飛んで来たのがそこの魔理沙。酷い風邪だったわ。お酒飲んで冷水なんて、被る物じゃないわよ。」
視線をよこされた魔理沙は、くいっと帽子

のつばを引きおろして顔を隠した。照れ隠しか何かのつもりだろうか。

「そこで、同じく冷水をかぶっていたあなたも風邪引いてるんじゃないかと思った。だけど、大丈夫だったって聞いたわ。」

　私は、話の時系列に合わせて記憶を辿る。不可解で、不快な配置のピース達が、少しずつ、正しい配置に組み直されていく。

「ところが、この子達がそろってこじらせちゃってね。薬の効果も薄いものだから、細菌かウイルスか知らないけど、一から調べて診断をやり直す事にした。治療を続けながら色々調べて、13日目にようやくわかった。この病気の主原因は、細菌でもウイルスでも無い、真菌類だった。」

　真菌類？

「カビとかイーストとか、キノコの仲間よ。こういう菌類が、しかもこんな全身症状で出てくる事は、普段はなかなか無いんだけど、偶然免疫力が弱まったり、今まで経験したことの無いタイプの菌に感染した場合は別。そういう時だけ発症してくる病気が有るのよ。同じ真菌による病気では、水虫とか……」

　深在性真菌症、日和見感染症……ちょっとリグルには分からない言葉が続いた。

「それで、そういう未経験の菌類に暴露する可能性を探った結果、たどり着いたの。一年前にここへ来た新しい妖怪である、あなたへ。」

「私も、キノコへの耐性には自信が有ったんだがな、未知のキノコには弱かったらしいぜ。」

　そうだ、魔理沙は言っていた。最近新しいキノコが見つかったスポット。それは、私の家のすぐ近くだった。

「そう、この幻想郷は大結界が出来て100年以上、実体との境界で仕切られたのは、500年以上前に遡る。同位相とはいっても、実態的には少し異なった構成になり始めているのよ。だから」

　だから、外の世界から新しい生き物が入ってきたりすると、大して強くない病原体でも、幻想郷の住人には脅威になりうる。

「そう。今回は、偶然重なったのね。その免疫力の低下と、新しい病原体への感染が。そして、それは当然逆の事例も起こりうる。即ち、二人への病原体を持ちこんだあなた自身が、こちらの病原体に対処できない可能性が有る。聞けばあなたにも数日前から風邪の症状が有ると。だから、兎達にあなたを探すように命じた。」

　パラリとカルテと思しき紙をめくりながら、永琳さんは長髪の兎に視線を投げた。

「師匠からは、ひょっとしたら抵抗されたりするかもしれないけど、多少強引にでも確保してほしいと言われて……。手荒なまねをして申し訳なかったわ。」

　件の薄藤色の長髪を持つ兎が、初めて私に対して声を発した。

「そう言えば、言い忘れたわね。私は八意永琳。医者で薬師（くすし）よ。そっちは、私の部下の鈴仙。よろしくね。」

　レイセン、と呼ばれた長髪の兎も、私に向けて会釈をした。

　えいりんという音列には少し覚えが有った。

「兎達にあなたを探しに行かせた後、真菌の感染症について色々調べたわ。そしたら、鈴仙達が報告に帰って来た。一応確保はしたので、ひとまず途中で遇って探すのに協力してもらった友人達と合流したから、その子の希望で自宅で待たせてあるって。その後、色々気になる事がわかって、私たちはあなたの家へ向かった……。」

　永琳さんは、その後の事を敢えて説明はしなかった。

「で、病人が倍増したわけだけど、あなたは治療が遅れた上、いろいろ合併症も出ててね。今日目を覚ますまでに見た、最後の景色覚えてるかしら？今はもう冬真っ盛りよ。」

　確かに、部屋に漂う空気は冬のそれ。ひんやりとした肌触りをしていた。それは決して、水色の髪の友人のせいだけではないだろう。

　しかし、全身の感覚はぼんやりと熱っぽく、湯船につかっていたらそのまま体が湯と溶けあってしまったような塩梅。そんなだるさで筋肉に力が入らず、未だベッドから起き上がることができない。

　そういうわけもあって、私への治療は未だ

続いているのだろう。僅かに動く首と眼球で確保できる視界には点滴の管が見えるし、永琳さんもなにやら話を続ける片手間に、せわしなく機械を操作している。
「で、治療をしている間に色々調べたわ。おそらくあなたが罹った病気の中で主になる症状は、これよ。」
そう言うと、永琳さんは小さなガラス瓶を取り出し私に見せた。その中には、見覚えのある蛾の死体が入っていた。白いカビに覆われた、ガの死体。
「これは、そこの魔理沙のコレクションだけどね。あなた蟲の妖怪でしょう？　こっちには、あなたやその先祖が経験したことの無い冬虫夏草の仲間がいたのね。ちょうど免疫力が下がった所に、それが発症してしまった。全身症状のでる真菌症なんて、私たちや人間達でも殆どないのでね、いろいろ新しい調べ物をするきっかけになったわ。」
永琳さんの周囲には、数冊の枕の如き巨大な書物が置かれている。
ここは治療室であり、書斎でも研究室でもなさそうだ。しかるべき場所では、臨床と関係の無い書物が堆（うずたか）く積み上げられている事が想像できた。
「冬虫夏草は、他の真菌症の菌と同様、まず胞子が皮膚や呼吸器、消化器を通して感染する。その後冬虫夏草の菌は体内で増殖して宿主を殺し、その体外にキノコを作って胞子を飛ばす。胞子を飛ばすのには、冬虫夏草が生きるのに有利な環境が必要なはず。実際、キノコになった冬虫夏草が見つかるのは種によってさまざまだけど、特徴があるわ。宿主は感染しても死ぬまで活動を続けるけど、死んでしまうと後は動かない。カタツムリの寄生虫、レウコクロリディウムや、昆虫でいえばハリガネムシの様に、宿主の行動自体を制御して自分に有利な行動を取らせる生き物もいる。冬虫夏草にも、そういうふうに宿主を操って自分の好きな場所でキノコを作れるように、進化した種類がいたのかもね。何が有ったのか知らないけど、あなたのお仲間さん達の話を聞く分には、発症後のあなたの行動は明らかに異常よ。急に友達に冷たくしたり、鈴仙やてゐが呼びかけてるのも全然聞こえていなかったみたいだって言うし。マジックで顔に落書きしようとしただけで、あんなに暴れるなんて……。」
「森のはずれで逢った時、何度も落ち着いてって言ったのに、全然聞いてくれなくってさ……。バットを振り回されたら、私たちもあするしかなかったのよ……。」
鈴仙と呼ばれた長髪の兎は、申し訳なさそうにそう言う。
……確かに、あの時の私には何も聞こえていなかった。どうだろう、当時の情景を思い出す、……対峙した兎達の唇は何やら動いているようにも思える……言葉を紡いでいたかもしれない。そうだとしたら、申し訳ないのはこちらの方だ。そして、私の大切な友人達へも……。
おぼろげながら思い出していく。
砂嵐の様にざらついた不明瞭な映像と音声の中。
右手に金属バット。
足元には血溜り。
そこにうずくまる黒い塊。
内耳を掻き毟るようなノイズに溶けかかった彼女の紡ぎ続ける言葉は……ご
「菌類だしね。例に挙げた寄生虫は卵の散布や産卵に有利なように宿主を操作するけど、例えば菌類なら胞子を飛ばしやすい場所や……、病気根絶のための治療や屠殺を受けない様に、周囲の仲間を遠ざけるため攻撃性や猜疑心を強く煽る。なんて想像だけど、どうかしら。実際、今まともな意思疎通が出来ているし、ここに運ばれた時のあなたの脳波の反応と今のそれとはパターンが大きく違う。病気で何かしらかの影響が有った事は、間違いないでしょう。巫女やブン屋とのお話も彼女達に聞いたけど、病気のあなたには少々刺激が強すぎた様ね。あと、何処から拾って来たのか知らないけど、あなたの部屋にあった外の世界の新聞も。」
永琳さんが見せたのは、見覚えのある古びた紙片だった。
「まっ、あいつ……あの巫女はちょっと愚直というか、手加減とかオブラートって物を知らないからな。ゆるしてやってくれよ。もっとも、向こうは直すつもりはないだろうか

ら、お前が慣れるしかないがな。」
まったく……と、私以外の一同は苦笑を浮かべた。巫女は、色々な意味で怖い人らしい。
「私たちの知性の高次性から、脳の動きは複雑に見えるけど、案外単純な一面だってある。脳のほんの一部の機能が破壊されただけで、その機能や特性は一変するわ。性格や行動の傾向を変えるのなんて、それより簡単。最低一種類の化学物質で事足りる。私たちの見ている意識なんて、所詮電気信号なのよ。その気になれば脳に電極でも差し込んで、機械からアウトプットした情報を伝えて見聞きしたりだってできる。脳から信号をアウトプットして、カメラやスピーカーを動かせるわ。私たちが思う程、私たちが保持する自己の存在には、神聖性も不可侵性も備わってはいない。それは、今回の起こったことでわかる様に、恐ろしい事実でもある。でも同時に、そういった事態を正しく理解することは、悲劇を救済する為に不可欠でもある。こういう症状の可能性に、早い段階から強い危機意識を持ててなかったのは、私のミスでもあったわ。それは、申し訳なかったわね。まぁ、あなた自身も、あまり強く気に病まない事ね。」
淡く、柔らかな微笑みを私に向け、永琳さんはそこで物語を終わりにした様だった。
窓から漏れ入る柔らかな白い光が、少し薄暗い部屋に浮かぶ塵や埃を照らし出す。
ふわりふわりと緩慢に舞うそれらだけが、ゆっくりとした時間を刻んでいた。

「ルーミア……チルノ……」
「……何かな?」
光に照らされた眩しい程の笑顔で、ルーミアが私の呼びかけに応えた。
私の罪深さを思えば、その毒の無い笑顔が私にとっては救いであり、むしろかえって痛々しくもあった。
「ごめん……凄く卑怯だけど……何を言っても言い訳にしかならないけど……あの時の事は、良くは覚えてない……今でも、あんまり思い出せない……。」
「……うん。」
彼女は、意味を持つ言葉は何も返さず、ただ私の言い分を受け止めてくれた。
「でも、あの時……」
あの時、我を失い凶器を振り下ろす私の足もとにうずくまり、薄い金髪を血で黒く汚しながら、彼女が呟いていた言葉が思い出される。
『……ごめんなさい。』
彼女は、謝っていた。何度も、何度も、謝り続けていた。
それでも、私は許さなかった。彼女が、逃げようとも抵抗しようともせず、最後の力も費やして紡いだその言葉を、私は終に聞き入れる事は無く。
「……私、本気で二人を殺してしまうつもりだった……多分。それは、覚えてる……。」
「……うん。」
結果、彼女は何とか生きて此処に居る。

しかし、私の犯した罪を、その頭に巻かれた白い包帯が、消えない十字架として私という悪魔に突き付けられていた。
大切な友人達を、疑い……
「ほんとに……ごめん。今の私には、それしか……言えない……。許してもらおうとも、……これまでみたいに……仲良くしてほしいとも言わない……。ただ……」
ただ……この謝罪の言葉さえも、私の自己満足でしかないのだけれど……
「ごめん……本当にごめん……。ごめん……」
この言葉さえ許されなかったら……私は今、自分自身さえ支えきれないだろう。折角目を覚ます事が出来たが、その意識もろとも粉々に崩壊してしまうに違いなかった。
今考えたら、全てがくだらない。色々重なったとはいえ、考えて見ればしょうもない情報ばかり……そんな物に、私は踊らされて仲間を疑い……彼女たちを、殺そうとまでしたのだ。
病気がどうだとか、そんな言い訳を自分に許すつもりはない。
ようやく自分に思考力が戻ってきたのだろうか、幻想郷に来てから今までに起こった……色々起こりすぎた……様々な事が、一挙に頭の中に溢れだしてきた。
友達、弾幕、宝探し、宴会、新聞、病気、バット、血。
灰色だった世界、楽しかった世界、猜疑と

憤怒、失われた楽園、この手で壊した幸せの形、醒めた悪夢、でも……もう過去には戻れない……。
　噴出した思考は、長期に渡って使用されず凝り固まっていた私の精神を、いとも簡単に決壊させ、その欠片をぽろぽろと零れさせた。
　あふれだしては熱く、流れ落ちては冷たく、私の涙はとまらない。仰向けのまま流す涙は耳に溜り、髪に染みた。
　何とか謝る意思を伝えようと色々喋っては見るが、自分で何を言っているか理解できない。自分の過ちへの悔悟が、大切な仲間達の無事を喜ぶ心が、それでも消えない罪が、ただただ謝りたい気持ち、そしてそのどれもが醜い自己弁護にしか思えず、自分で自分を許せない。
　それらがないまぜになり、私の頭をぼぅっと熱く、風船のように膨れさせる。その内圧でギュウギュウに張り詰めて、私の思考はぐちゃぐちゃだ。
　涙で視界は曇り、顔面は引きつり上手く動かない。熱くなった胸が喉を絞り上げ、言葉も呼吸もバラバラ。
　ただ、自分の罪深さと……自分が泣いている事だけが、理解できた。
「リグル……あたいの方が悪かったよ。もぅ、おはぎに氷入れたりしないからさぁ……」
　困り切った様な声色の、チルノの言葉が聞こえてくる。
「リグル、そんなに謝らなくても大丈夫だよ……。私たちは……」
　そうして気を遣われるのが、逆に辛い。彼女らの優しさに、自分が甘えてしまいそうで。
　そんな権利なんて、資格なんて、私には無いのだ。
　何を言おうと、しようと、私の罪は許されない。消えはしない。どんなに願おうと、努力しようと、死者は甦りはしない。砕けたガラスが元に戻らない様に、壊してしまった幸せを元に戻すことなんてできないんだ。
「そんな事は無いよリグル。私たちを見て。私たちは、あなたを許せるよ。」
　いいんだ。もういいんだよ。私なんかにあなたの優しさはもったいなさすぎる。あなた達が、私を許す努力をする必要なんてないのだ。
　最後に見た夢は、私には十分すぎる程幸せだったさ。
　元に戻るだけだ。誰だって、結局は独りで生きて死ぬ。その運命は、変わらない。
　私に優しくしないで。私を見ないで。私の手は汚れてる。あなたの血で汚れてる。
　だから、私を見ないで。
　かけられる温かい言葉を拒否し、いやいやをするように首を振った。
　勢いで、しずくがぽたりぽたりと零れ落ちる。
　幼児の様に取り乱す私の肩に、白い袖の手がそっと回された。
　袖や金髪に涙が染みるのにも、揺する頭が包帯を巻いた頭にぶつかるのにもかまわず、顔に暖かい頬を寄せて、彼女はふんわりと、わたぼうしの様にやわらかな声で、言った。
「親友よ、どうか泣かないで。世界があなたを許さなくても、私はあなたを許します。あなたが世界を許さなくても、私はあなたを許します。あなたの中の世界で、私があなたを許さないのなら、私に教えて。あなたはどうしたら、私を許してくれますか？」
「リグル、あたいは実はあんまり頭は良くなくて、みんなの心の中なんて正直あんまりわかんない。だけど、あたいなりにみんなの心の中を考えて、すこしでもわかろうって、せいいっぱいがんばってるつもり。それでも、なかなかわかんない。いつも、ごめんねごめんねって、思ってるんだよ？」
「私たちが見ている世界は、鳥目で無くたって狭くて真っ暗けなもんさ。結局、自分の世界は自分だけの勝手な物で、私たちはその中で生きるだけ。どんなにわかったふりをしても、他人の事なんてわかりっこない。信じてるなんて言っても、本心から信じられはしない。自分は独りだって気付くのが寂しいから、わかりあえた振りをして、信じあってるふりをしてるだけ。悲しいけど、薄々ね、わかってるさ。だけど、私たちはその現実に抵

抗する力が有る。それが、想像力。幻想の力だよ。まっ暗闇の中に勇気を出して、進んでいく。わかり合おうとする努力さ。現実との戦いが集まる場所、それがこの幻想郷だよ、リグル。」

「私たちはこの小さな世界で、いつも楽しく戦ってるよ。自分の世界の現実と。どんなに努力しても、わかりあえず、信じあえず、傷付け合う事は絶対に避けられないなら、私はそれとも戦おう。その努力が足りなくて、あなたを傷つけてしまったなら、私は精一杯あなたに謝るよ。それが私の、精一杯の努力。だから、もう一度リグル、あなたの世界に入れてくれたら、私は嬉しいな。」

「……私も、信頼関係って奴の正体を考えたことが有るぜ。この幻想郷で、弾幕ごっこをしながらな。昨日は弾を撃ち合って、次の日には酒飲んで笑い合う世界でさ。それは多分、安心して傷付け合える関係なんだな。勿論、一朝一夕にできるもんじゃないぜ。だけど、もやもやと、段々と、徐々にできていく物が有ると思うんだ。冗談や憎まれ口を言いあって、小突きあって、悪戯を仕掛け合って、ネックロックをかけあって、時には本音をぶつけ合うが故に喧嘩する事もあるだろう。果ては弾を撃ちあうときたもんだ。でも、それが全くない関係って何なんだ？それが出来るってことは、傷付け合えるって事は、幸せなことなんじゃないかと、自然なことなんじゃないかとさ……ああ、自分で何言ってるかわからんが……」

　ガラじゃないぜ。と、魔理沙は帽子のつばを引き下ろし、発言権を放棄してしまった。

「リグル。あなたはまだ謝り続けてるね。誰に謝ってるの？これだけ謝っているのだから、もう許してあげてもいいのにね。どんな過ちだって、許されないことはないはずだよ。取り返せないミスなんかない。次から気をつければいい。なら……あなたは、取り返しのつかない過ちを犯してしまったのかな？取り返しのつかない事なら、なおのこと許してあげてほしい。いくら謝ったって、起こってしまった事は、どうにもならないのだから。それでもあなたは、みじめな声で謝り続けている。ほら今も、

『ごめんなさい　ごめんなさい……』

　確かに、壊れてしまった世界は、元には戻らない。なら、新しく作って行けばいいと思うな。特別な事じゃないよ。私たちはいつも、新しい世界を作りながら生きてきた。これからも、新しい、幸せな世界を作りたいの。一緒にね。」

　私を抱く手に、少しだけ力が入ったのがわかった。

　それで気付いたが、いつの間にか私の涙は止まっていた。パリパリに乾いた目じりが少し鬱陶しい。

「もういい加減、許してあげて……こんなにもみじめな声で、謝っているのだから……。リグル、あなたを許してあげて？私を、許して。ね？」

　私は、何も言えなかった。

　何か考えたわけでもなかった。

ただ、寝る子をあやす母の様に私を覆う友人の暖かい体を、ようやく動いた腕で、感覚の薄い痺れた手で、下からゆっくり抱き返した。

　それは、とてもシンプルで、自然な答え。

「リグル！」

駆け寄り、背中にまわした手の平を握る手の平が、二組。

冷たいのが一人、爪が長いのが一人。

みんな、私の大切な仲間達。

私を包む暖かい温もりを、信じよう。

目は見えないが、私は、自分が笑っていることが分かった。

泣き疲れてしまったのか、少し眠い。

明日には、無理かもしれない。

明後日も、厳しいかもしれない。

一週間後は、一月後は、わからない。

だけどもうすぐ、もう一度、新しい日々を始めよう。

　この楽園で、ルーミア、みすちー、チルノ。そこに、魔理沙やこれから出会う新らしい友達を加えてもいい。楽しい日々を始めよう。

辛い事、悲しい事、たくさんあっただろう。

だから今は、一休みすればいい。

痛みや苦しみや怒りと、楽しさや驚きや喜びと。

　最高にめんどくさくて、無駄で、辛くて、

疲れる、熱く、幸せな世界。
　この冷たい世界に、狭まった暗い視界で、
この宵闇に私が手を伸ばせば、いつかきっと
辿りつけるだろう……。

When Wriggle Cry？

著者：crimson-angel（Jade.）

手がリグルっぽくねェ酷ぇ
撫でられるみゃ
思った。
ルーミア
好き過ぎ。
これは、
月刊
NightBug
ですよ？

心配顔、困り顔のルーミア。可愛い。
可愛すぎじゃね？　恐るべきスペック。

あとがき

どうもＪａｄｅ．と申します。だれか記憶してくださっているかな……かな？

えー、私がこうして先月号からの続き、この話のオチを書いていると言う事は、……つまりそう言う事です。

はいはい自演乙自演乙ツマンネ。と。

１月号で来月から休むとか言って見事にＫＯＮＯＺＡＭＡですよ。長らくお付き合いいただいた方には、本当にありがとうございます。ｐｒｅｌｕｄｅｎａｎｏ様、掲示板での書き込みありがとうございました。バレバレでした！

もったいなくもＰｉｘｉｖで私をお気に入り登録して下さっている方々には、誰が書いたかもバレバレというね。

敢えてＰ．Ｎ．をｃｒｉｍｓｏｎ‐ａｎｇｅｌとしたのは、元ネタ本家の某所で使わせていただいていた名前と言う事と、単純にアンハッピーなオチがどういう受け止められ方をするのかなー、というのに興味がありまして。その為に、できうる限り読み手の皆さまの印象をゼロに戻したくてこういう形にさせていただきました。色々、すみませんでした。本気で。

この話の構想自体は先年のホラー特集あたりからありましたが、当時は色々あって書けず。パロ特集とあってこれ幸いと形にしたものです。これ……怖かったですか？　あんまりですよね……？

しかし、いろいろキツイシーンは、自分で書いていてこれほど辛いとは思いませんでした。ホラーもグロもたいして効かない私なのですが、そんな問題じゃ無かった。とても描

最後、リグルの家で。リグルに優しい言葉を
かけられた時の笑顔。この直後に……

けず、自重してしまった場面がいくつもありました。

キャラ愛ゆえと自分を甘やかすか、まだまだぬるいと自己批判するか。周りの誰かの事以前に、自分の事すら全然理解が追いつきません。

これでも自分のできうる限りの情熱をぶつけてきたつもりでしたが、本当に、まだまだです。

某元ネタの、私の尊敬する作家さんは、自分が生み出されたキャラでこれだけの事をやってのけた。

単純に、凄まじいエネルギーなのだなぁと。

書き手に回って、元作品のまた新しいすごさや書き手の情熱が理解できました。原作を一層理解し好きになれる。それも、二次創作の魅力かもしれません。

小崎様には、PN偽装したり毎度面倒な編集等色々御負担をおかけしてしまいました。本当にすみませんでした。

ガチ麻雀SS書こうとして二行でやめたのは悪い思い出……とりあえず、ひぐらしネタ被らなくて良かった。ニアミスしたうみねこは美味しくry　しかし、微妙にMtGネタを島2～3枚程立てて構えていらっしゃる方がいらっしゃってちょっと嬉しい気分に。ただ、しばらくブランクあるので、インベイやカマ○ルさんなネタとか持ってきても真剣に超誰特なので自重自重。奇跡的に東方にもMtGにも興味が有るあなた！　某動画サイトで「東方MWS」とかで検索するといいよ！

……それはさておき、今後は、今度こそ本気でしばらく大きな投稿は不可能だと思います。元からイラネとか心の中でだけ叫んで、泣いちゃうから。

勇気を出して手を伸ばせば、届くものがある。

やらないでつまらないと嘆くより、やって傷ついた方が楽しいじゃない。

実行するのは難しいですが、一応そう言う

心持ちで、やらせていただいております。
それでは、皆様の投稿を毎号楽しみにしつつしばしお暇を。掲示板や某イラストSNSサイト、その他の場所でお会いできたら、幸せです。
現実に反逆！　幻想郷に乾杯！

Ｊａｄｅ．（Ｐｉｘｉｖ　ＩＤ
３２７５７２）

「ちょっとえーりーん、Ｗｅｂカメラと延長コードとマイクとスピーカーまーだー？？」

もしも全て脳が映し出すノイズなら
鉄の壁と冷めてゆく景色　目を閉じる
数え切れぬ星が流れて　少しだけの優しさを
握りしめたポケットの中　最期に見た夢

When Wriggle Cry?

10th Gekkan Nightbug presents, Welcome to Gensokyo...
"WHEN THEY CRY?"

月刊ナイトバグ　2010年3月号

2010年2月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

ということで、今月はかろうじて22日に出すことができました。やれやれだぜ。

今月はぼちぼち例大祭が近いこともあり全体的な投稿数は少なかったですが、ＳＳは面白い作品が多かったですね。中でも、まず試みからして「やってくれた」のがJade.さんだったわけですが、ねぇ……、全く本当にこの赤天使さんときたら。ある意味、先々月号(しばらく休載宣言)からの3ヶ月かけてのどっきりですよ！どっきりしたよ！どういうことだよ！

えー……、読者の皆様は、是非今一度、過去号からJade.さんのＳＳと合わせてあとがきを読み返してみてください。楽しめること請け合いです。ちなみに今回目次で作品名が無いのは本人からのリクエストです。編集力はないが、おふざけは出来る限り応援する雑誌。それが月刊NIGHTBUG。

雛特集については、まず王道というか厄神様との絡みネタは、結構苦戦されてた方が多かったようです。他作品の1ボス、2ボスということで、キャラ的には近そうに見えて、あまりつながりがないんですよね。そんな中で意外というか、ひよこネタは結構ありました。正直、こっちは自分は全く思いついてなかったので、投稿が集まって驚きました。くらげんさん大勝利ですよ。

さて、来月号のテーマは「桜特集」になります。私の住んでる辺りでは、実際に咲くのはゴールデンウィーク頃ですが、一足先に宴会気分で花見を楽しめたらいいですね。

2010 / 2/ 22　小崎

次号4月号は3月22日（月）発行予定！

※次号の投稿締切は3月15日(月)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG 2010年3月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

涼音 奏
貴キ
IDEA(GAGrim)
緑
Wrigglove
ADDA
くらげん
蛍光流動
キッカ
長閑
悠奈
中国
如月翔
西遊
壁々
くろと
夏樹 真
社 蛍夜
Jade.
夜行
東
羅外
HOUSE
preludenano
Step
ひどぅん
草加あおい
怒羅悪
巳
小崎